二度目の人生は魔法先生ネギま!の世界

CODE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二度目の人生は魔法先生ネギま！の世界

【Ｎコード】
Ｎ６５３２Ｉ

【作者名】
ＣＯＤＥ

【あらすじ】
ミッドチルダの時空管理局（本局）で平和で楽しくそして忙しく働いていたヒビキ・ラドクリフ（２２歳：女）
忙しさのあまり休みも取れず働き詰めた末に彼女を待っていたのは交通事故、即死だった。
次に目が覚めた場所に居たのは変なおっさん（自称神）
間違って殺したお詫びに二度目の人生プレゼント、という訳で始まった私のセカンドライフは魔法先生ネギま！の世界
まさかの漫画の世界で一体私はどうなるの？

プロローグ

ども、ヒビキ・ラドクリフ（２２歳／女）です。

突然ですが私、死んでしまったようでして…。

生前の私、時空管理局という所でデバイスマイスターやってたんですけどね、あまりに忙しくて中々休み取れなかったんですよ。そしたら疲れが溜まりに溜まって車の運転中についウトウトとしちゃいまして…。

ドーン！！

ですよ、多分即死なんじゃないかな～、車グッシャグシャでしたからね、あぁ…買ったばかりなのに…。

んな訳で！ヒビキ・ラドクリフは２２歳というピチピチ（死語）の若さでこの世とオサラバした訳だったんですけど…何、今のこの状況。

私の足下には雲が一面に広がっており、目の前には巨大な神殿。

突っ立ってても仕方ないので私は神殿に向かい歩き出す、少し歩いて神殿内部に入ると玉座に白髪白髭のおっさんが目を閉じて座ってた。

このおっさん誰？寝てんの？とか思ってるとおっさんが目を開けて私を見る、そして口を開いて一言。

「わりぃ、間違って殺しちゃった」

私はダッシュで間合いを詰め全力の右ストレートをそのムカつく顔

にぶちこんだ、今の私なら世界を狙える、そう確信出来る程素晴らしい一撃だったと言っておこう。

「だ、だからゴメンて謝ってるじゃん！殴る事無いじゃん！」

「やかましい！アンタが何者か知らないけど間違って殺されて黙ってられるか！！」

本来死ぬのはイビキ・ラドクリフさん（97歳／女）だったらしい。私の怒りは限界ギリギリ、表面張力で耐えてる水の様な状態、これ以上刺激を与えるとこのおっさんを動かなくなるまで殴り続けそうな—いや、動かなくなっても殴ってそうだ、つまりその位怒っていた。

「だからね、もう一度人生やり直させてあげようかな～なんて思ってる訳よ、僕ちゃんとしては」

僕ちゃん…しかも喋り方がなんかムカつく…。

しかし『人生をやり直させてあげよう』？このおっさん（自称神らしい）にそんな力が本当あるのか…？

「神様に不可能はちょっとしかなーいの」

ウザい…

とにかく私は一秒でも早くこの場、というかこのおっさんを視界から消し去りたかったので「じゃあ頼みます」と言っておいた。

「オッケーオッケー！んじゃ説明だけしとくね」

「ハイハイ早くして下さいね」

「まず一つ、君の居た世界での蘇生は無理」
「二つ目、全くの別人で赤ん坊からスタート」
「三つ目、記憶は引き継ぎ可能」

ってとこかなぁ～とおっさんが説明を終える、つまり『強くてニューゲーム、ただし別のゲームで』、と言ったところか。

「迷惑掛けた分＋αしとくからね、だからさほら、そのファイティングポーズいい加減解除してくんないかな～なんて」

私は某ボクシング漫画で覚えたフリッカーの構えを解いた、少しでもふざけた事をぬかしたら殴ってやろうと思っていたのだ。

「転生先は色々面白そうな世界をチョイスしといたから、二度目の人生楽しんでおいで～」

「お前に言われ無くても楽しむわ！」

「ははっ、それじゃあいくよ～」

「ちちんぷいぷいの～ぷいっ！」

ふざけた呪文と共に私の意識は闇に落ちた。
願わくば二度目の人生は幸せになりたいと強く、そらもう強く願いつつ。

1時間目「転生魔法少女詩音誕生」（前書き）

稚拙ながら頑張ってみようかと思います。

1時間目「転生魔法少女詩音誕生」

ども、ヒビキ・ラドクリフ改め結崎詩音（ゆいざきしおん）です。

転生先の家族構成は両親に歳の離れた兄二人に私という極普通…では無く、ＩＴ関連の会社を経営する父である社長の娘として生まれました。

母の職業は謎です、専業主婦では無いようですが。

無事に転生した訳ですが意識がハッキリしてきたのは2歳頃です。

それから私はこの世界がどういう世界かを知る為に情報収集を始めました。

調べるに辺りまずは文字と言語の習得。

言語は両親が話してるのを聞いて自然に、文字も何やら覚えがあるもので習得は楽に出来たんですが…調べて直ぐに分かりました。

此処、第９７管理外世界、地球の日本だったんですね。

何故知ってるかって？前世で知り合いのデバイス制作を手伝った事がありまして、その子が地球出身者だったんですよ、その際その子と結構仲良くなって色々日本の事を聞いてたりした訳ですよ。

次にした事は魔力の有無の確認。

前世の私はＤランクの魔力保有量で大した魔法は使えなかったんですが、どうやら今の私は恐らくＡＡ＋ランクはあるようです。

試しに人気の少ない場所で魔力弾を生成して木にぶつけたら粉々に砕けちって、驚いてその場から逃げだしたのは良い思い出です。

しかし、４歳になった頃ちょっとした油断から両親にバレてしまいどう説明しようか悩んでいると。

「まさかこれ程の魔法の才能があるとは」

（は？魔法の事知ってるの？確か地球じゃ一般には魔法が知られていないはずなのに…）

などと考えていると。

「実は父さんと母さんも魔法使いなんだよ」

なんですと！？って魔法使い？魔導師じゃなくて？

何だかんだで両親の前では魔法公認になりました、ちなみに兄達には秘密だそうです。

次に私が取りかかったのはデバイスの制作。

幸いにもデバイス制作出来る程度の環境があったので大丈夫だろうと軽い気持ちでいたんですが、両親に設計データを渡すと。

「これ一個作るのに２０００万円以上掛かるぞ」

「いつこんなの覚えたの？」

と言われた上、軽く不審に思われ泣く泣く断念…しませんでした。

デバイスマイスターとしての知識の一部を両親に披露して会社に生かせばその利益で制作資金ガッポリなのでは？

そう思い、明らかに不審なのは分かってましたがどうしても諦めきれない私は両親に話して何とか了承を得ました、すっごい渋ってましたけどね。

結局完成したのはそれから3年後、私が7歳になってからでした。

デバイス名は『ソウルオブリバース』

某ＲＰＧの隠しダンジョンの名前を拝借しました。いや、何気に転生した私に合ってるかなと思いまして。

先の一件により両親の私への認識は『天才』になってました、兄二人は『自慢の妹』としてメチャクチャ可愛がってくれました、いえ、以前から可愛がってくれてたんですが更に磨きがかかりまして…ぶっちゃけシスコンになりました。

さて、両親への魔法バレ以降、この３年間たまに両親と共に魔法の修行は続けてた訳ですが。

修行開始から１ヶ月経った頃です。

「プラクテ・ビキ・ナル」

ん？またも聞いた事があるような…。

「サギタ・マギカ！」

！この詠唱って！確か前世ではやてちゃんから借りて読んだ漫画にあったやつ！

まさかと思い私は両親に「麻帆良学園って知ってる？」と訊ねると「知ってるよ、父さんも母さんもそこの卒業生だからね」とのお答えが。

ま、まさか…まさか…まさか！

この世界って『魔法先生ネギま！』の世界か！？

ヒビキ・ラドクリフ改め私、結崎詩音（当時４歳）はこの時ようやく自分の生きているこの世界が漫画の世界だと気付いたのでした。

はぁ、原作途中までしか読んで無いのに…。

2時間目「そうだ京都、行こう」

「そうだ京都、行こう」

小学2年生の夏休み、どこぞのキャッチコピーのような母のこの一言で京都旅行が決定しました。

「お父さーん、お母さんのいつものクセが出たよー」

母はたまに突拍子も無い事を言い出します、今回もそれです。

「良いじゃないか京都、八つ橋とか八つ橋とか八つ橋とか」

「食べ物だけですか」

お父さんもお父さんです、この母にしてこの父ありです。

「でも何でまた京都に？」

「八つ橋食べたくなっちゃって」

もう何も言うまい…。

「俺は無理だ、詩音と旅行はとてつもなく魅力的な話しだが甲子園出場でそうも言ってられないからな」

下の兄は高校3年生で野球部所属、5年ぶりの甲子園出場でラストチャンス、流石に旅行してる暇は無さそうです。

野球やってる姿はカッコイイけどシスコンです。

「ふっ、甲子園と詩音を天秤に掛けて甲子園を取るとは、お前の詩音への愛はその程度だったと言う訳か」

上の兄は大学2年生です。
以前学園祭に連れて行ってもらった時に知ったんですが結構モテてました。
でもシスコンなんです。

「何だと！」

「本当の事だろ」

この2人、私への愛がどうこうでいつもケンカになります、お願いですから仲良くして下さい。

「お父さんも仕事が有るから無理だな。詩音、お兄ちゃん達は放っておいてお母さんと2人で行って来なさい」

「分かりました。お母さん、いつから行く予定ですか？」

ギャーギャー騒いでいる兄達はもはや放置の方向で話が進んで行きます、まともに相手してると疲れますからね。

「そうね、それじゃあ明日早速行きましょう、2週間位泊まりで」

思いついたら則実行、なんか最初から兄達を連れて行くつもり無かったんじゃないかと疑ってしまいます。
しかも八つ橋食べたいという理由から2週間の京都旅行が決定するのも正直どうかと思います。

しかし京都ですか…捜せば刹那に会えるかもしれませんね、木乃香は多分麻帆良学園に行ってるはずですし。

４歳の時、この世界が漫画の中の世界だと気付いた私は原作の時期と今の時期を比べました、そしたらピッタリアスナ達と同い年でしたからね。

１週間程悩みましたよ、主に原作に介入するか否かで。

しかし両親が麻帆良学園の卒業生で魔法使い、これは多少なりとも関わる事になりそうですし…。

ちなみにその時の結論は”流れに任せる”でした。

でも今は麻帆良とは違う普通の私立小学校に通ってますからね、何事もなければ特に気にしなくても良いんじゃないでしょうか？

今回の京都旅行、別に原作に関わるとか抜きで原作キャラを一目見てみたいですが…。

うーむ…運に任せましょう、うん、それが良い。

運が良ければ会える、その位の気持ちでいましょう。

…そう思ってた時期が私にもありました。

「紹介しよう、桜咲刹那君だ」

「初めまして、桜咲刹那です」

何なんですかこれは！？予定調和ですか！？

京都旅行２日目。

母の職業が判明しました、主婦兼神鳴流の剣士です。
魔法使いじゃなかったんかい！

あぁお母さん…これが京都旅行の本当の目的だったのですね…。

何でも昔の母は体を鍛える為に神鳴流を習う事にしたらしいです、
学園長の紹介で。
いや、体鍛えるにしても色々なものをぶっ飛ばし過ぎでしょ我が母、
そして学園長よ。
学園卒業後はこちらによく来ていたらしく（たまに居なくなると思
ったら…）、詠春さんとはお互いよく知った仲だそうで。
ただ母は気の扱いには向いておらず魔力によって神鳴流を振るって
るらしいですけどね。

「結崎詩音です、初めまして」

あーもう、予定調和だろうが何だろうが出会ってしまったもんはし
ゃーない！

仲良くやれたら良いな～…。

3時間目「これは旅行では無い、修業だ」（前書き）

刹那の話し方とか表現の仕方とか上手く書けませんでした…

3時間目「これは旅行では無い、修業だ」

「神鳴流奥義、斬岩剣！」

「うわわわわわ！とうっ！」

ダンッ！

刹那の放った奥義を私は瞬動で右に回避します。

ドンッ！

「しまっ！」

しかし、直ぐ様刹那の瞬動により追い付かれ、気付いた時には壁に叩き付けられてました。

「そこまで！」

京都旅行7日目

思いがけぬ刹那との出会いから6日経ちました。

現在、私は本山にて神鳴流の修行を受けてます。

このまま神鳴流を続けてたら魔導師では無く魔導騎士…いえ、この場合魔導剣士とでも言いましょう（あくまで魔法使いでは無く魔導師ですからね）、それにジョブチェンジ出来そうですね。

実は修行を始めてから気付いた事なんですが、この身体中々のチー

トボディの様です。
簡単に言うと物事の習得が早く、身体能力も一般人と比べてかなり高いんですよ。
後は病気になりにくいという特性さえ有れば、某機動戦士の主人公並に優れてますね。
あの自称神を名乗るおっさんが言ってた＋αとはきっとこの事だったんでしょう。

とまぁ、チートボディのお陰か、僅か6日で未熟ながら瞬動が出来るまでになりました。剣の方は地道に基礎やってます、奥義は流石にまだ撃てません。

しかし今日は刹那と始めての模擬戦、結果は防戦一方で攻める余裕なんてありませんでした。
ちなみにデバイスは使用してませんし存在も秘密にしてます。

「痛たたた…刹那、もうちょい手加減して下さい！」

「す、すまない、しかし手を抜いては…」

手抜きと手加減は別だと思うのですが。

「剣を握って6日目の私がまともな相手になれる訳無いでしょう」

「確かにそうだが、詩音なら大丈夫な気がしたんだ」

何の根拠が有るんですか…

実は、刹那も出会った当初は私に対してアスナ達に対する話し方だったんですが、なんかむず痒かったので普通の話し方に変えてもら

いました。ええ、私のワガママです。

「詩音君は神鳴流を習って数日とは思えない上達ぶりだね」

詠春さんとお母さんが私と刹那の元へ近付いて来ました。

「いえいえ、それほどでも有りませんよ」

チートボディのお陰ですとも言えませんからね。

「謙遜しなくていいのよ詩音ちゃん、お母さんも6日では今の詩音ちゃんにも及ばなかったんだから」

「このまま修行を続ければ、いずれは神鳴流の剣士として立派にやっていけるでしょう」

私は魔導師、もしくは魔導剣士を目指そうと思ってるので剣士一本という訳にもいきません。

それに魔導剣士にしても、どちらかと言えば魔導師よりで、魔法優先のタイプを目指すつもりですから。

……なんか、はやてちゃんを目標にしてるみたいに思えてきました、あの子は魔導騎士でしたが。

そんな感じで更に1週間修行を続けついに京都旅行14日目、つまり最終日になりました。

旅行と言う名の修業期間だったのは気の所為でしょうか？まともに観光出来たのは初日と昨日の2日だったのですが…。

私と母は駅のホームで電車待ちの状態。見送りに刹那が来てくれたのは結構嬉しいです。

と、電車が着いたようですね。

「では刹那、私はこれで帰ります」

「ああ、気を付けて」

約2週間も共に修業してたのでお別れとなるとやはり寂しいものですね。

「今度はいつ会えるか分かりませんが連絡は取り合いましょう、折角友人になれたのですから」

「友人か…そうだな、分かったそうしよう」

「大丈夫よ」

お母さん？

「夏休みには詩音ちゃん連れて毎年来るつもりだから」

エエェェェェッ！？

「刹那ちゃんも同い年の子が相手にいると良い刺激になりそうだし、詩音ちゃんも強くなれるし一石二鳥じゃない」

この瞬間、私の毎年の夏休みの半分は神鳴流の修業という逃げられない予定が決定しました。

「いっそ京都に引っ越そうかしら～♪」

勘弁して下さい。

―帰りの電車の中

「それにしても、どうして私に神鳴流を習わそうと思ったんですか？」

「ん～、なんか詩音ちゃん、いずれ大きなイザコザに巻き込まれそうな気がしてね、今のまま魔法使いとしてだけじゃ力不足だと思って」

「そ、そうですか」

母の予感（根拠は無い）が正しければ、間違い無く私は原作介入する事になりそうですね…、それが望まざる事だとしても。

と言っても、今回の刹那と友人になった事で考えは変わりました。

この世界が例え漫画の世界だとしても、今私が住んでるこの世界は間違い無く現実、そこに住んでる人達はキャラクター等では無く本物、そこに有る思いも作られたモノなんかじゃ無いと気付きました。本来当たり前の事なのに、漫画の世界だと知ってから全て非現実的なものと知らず知らず捉えるようになってた自分が恥ずかしい。

今の私は起こりうる被害をいかに軽減出来るか考えるようになってました。

不完全な未来知識とはいえ知ってるからこそ防げる事もあるでしょうから。

「そういえば宿題どこまで終わってるの？」

「あぁぁぁっ！まだ殆ど手を付けて無い…」

その前に、帰ったら溜まってる夏休みの宿題片付けないと…。

4時間目「やはり母は強かった」（前書き）

戦闘描写って難しいですね…

4時間目「やはり母は強かった」

―某所結界内にて

「ラ・ギア・エス・ティマ・クラウ・ディア、雷の精霊１０１柱！集い来たりて敵を射て！魔法の射手連弾・雷の１０１矢！」

〔バシュ！〕

「はぁぁぁぁっ！！」

私の放った魔法の射手に対し、お母さんは自分に当たる魔法の射手だけを見極め、剣で叩き落としながら構わず突っ込んで来ます。

「やはりこの程度の攻撃は効きませんか！」

「無駄口叩いてる暇は無いわよ！【神鳴流奥義・斬空閃】」

「くっ！【Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ】」

〔パァン！〕

右手を前に出し、曲線状に迫り来る気の斬撃をプロテクションで防ぐ。

〔ダンッ！〕

「【Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ＋】」

後方へ瞬動と同時に直ぐ様ディバインスフィアを形成、アクセルシューターを８発射出。

数は魔法の矢に比べると格段に少ないですが、詠唱無しで瞬時に発動出来る上、一発当たりの威力は魔法の矢を上回ります、それ＋自動追尾性能も付加させてるので回避は困難なはず！

「解放【魔法の射手連弾・火の９７矢】」

遅延魔法！？

〔ドンッ！〕

８発のアクセルシューターは火の９７矢により全弾撃墜、その爆発の閃光により一瞬視界を遮られたと同時に、瞬動で背後に回り込まれ首筋に剣を当てられてました、私の負けですね…。

「チェックメイト♪」

「はぁ、これで１５３戦０勝１５３敗ですか、いい加減凹みますよ…既に凹んでますが」

京都旅行（と言う名の修業）から１０ヶ月経ちました。
あれ以来、母から剣と魔法を使った実戦形式の修業を付けてもらってますが全く歯が立ちません。
私は神鳴流＋西洋魔術＋ミッドチルダ式魔法を駆使してるというのに、どんだけ強いんですかお母さん…。

「これでも２０年以上の経験があるの、そう簡単に負ける訳にはいかないでしょ」

実際問題いくら攻め手が多くてもそれを的確に使用出来る判断力が私には不足してますからね、こればかりは実戦経験積むしか無いで

しょう。

「中学生になるまでにせめて1勝はしたいものです」

「時間の許す限り付き合ってあげるわよ、こってりみっちりとね♪」

程々でお願いします。

ちなみにミッドチルダ式魔法に関しては、私のオリジナル魔法という事で通してます、でもどう見てもこの世界の魔法とは違うので不思議に思われてます。
あまり追求してこないのはやはり親だからでしょうかね？

「目標は小学校卒業までにワイバーン位は倒せるようになりましょう」

原作始まるまで無事でいられるか心配になってきました…。

―数週間後

〔ドゴォォォォン！〕

「一応、試作としては上出来ですかね」

実は以前から西洋魔術とミッドチルダ式魔法の融合魔法を開発してたのですが、やっと試作魔法が完成しました。
私には魔力変換資質が無いのでミッドチルダ式魔法だと属性付与が出来なかったんです、それを西洋魔術の詠唱を＋する事で各属性の付与に成功。
詠唱も一節だけなのでミッドチルダ式の利点を損なわなくて済みま

す。

この世界の魔法は属性が結構重要なので開発には力入れましたよ～。

「ま、この程度でお母さんやワイバーンを倒せるなんて思ってませんけど」

完成した喜びもつかの間、目の前の大きな壁を考えると気が重くなりますね…。

5時間目「頼りにして下さい」（前書き）

詩音の始動キー「ラ・ギア・エス・ティマ・クラウ・ディア」の元ネタ

ラ・ギア→ラギア（モンハン）
エス・ティマ→エスティマ（車）
クラウ・ディア→クラウディア（リリなのに出てくる艦）

5時間目「頼りにして下さい」

時が経つのは早いもので私も１２歳、小学６年生になりました。

―８月・京都

毎年の恒例行事のように私は夏休みに京都に来ています。
実は２年目以降、家から京都まで人目に付かない場所に数ヶ所の中継点を作り転移魔法使って１人で来てたりします、流石に一気に京都まで転移は無理でした。
母からは「旅の醍醐味が台無しじゃない！」と怒られましたが電車に乗るより魔法で転移した方が楽なのでそうしてます。というか母よ、アンタしょっちゅう来てるでしょうが！
それにミッドチルダと違って無断で転移魔法を使っても法に触れ無いので大助かりですよ♪

「詩音君、いらっしゃい」

「こんにちは詠春さん、今年もお世話になります」

出迎えてくれた詠春さんに笑顔で挨拶を返し、いつも使わせてもらってる部屋に荷物を置いて少しばかり休憩してると足音が近付いて来ました。

「詩音、入るぞ」

「どうぞ～」

足音の主はやはり刹那でしたか。

刹那を部屋に招き入れ座布団に座らせます。

「1年ぶりだな、腕は上げただろうな？」

「もちろん、それに今回は秘密兵器も使わせてもらいますよ」

「秘密兵器？何だそれは？」

今までは秘密にしていたデバイスの初お披露目です。

「今言ったら秘密じゃ無くなるじゃないですか、修業が始まったら分かりますよ」

「それもそうだな、楽しみにしておこう」

「驚く事間違い無し、です」

そのまま30分程雑談した後、修業場に向かうと既に詠春さんが居ました。

「封時結界、展開」

いつもどおり結界を張り私達3人と外部を遮断、特に今回はデバイスも使うので外部に情報は洩らしたく無いですしね、少なくとも今はまだ。

「では刹那、早速見せてあげましょう」

「カード？」

私は懐からカードを取り出し起動ワードを口にします。

「ソウルオブリバース、セットアップ！」

「「なっ！？」」

銀色の輝きと共にバリアジャケットを形成、刹那と詠春さんも驚いたようですね。

「ソードモード、チェンジ」

「杖から刀に変わった…」

「結崎詩音、魔導剣士としてお相手します」

「それがお前の本気か。良いだろう、私も全力で挑ませてもらう！」

「２人共準備は良いね、それでは…始め！」

詠春さんの合図と同時に刹那が動きます。

「ラ・ギア・エス・ティマ・クラウ・ディア！光の精霊３９柱！集い来たりて敵を射て！魔法の射手！連弾・光の３９矢！」

向かってくる刹那に対し私は光の３９矢で迎撃、避けるか受けるか？

「この程度」

余裕で避けられましたね…しかし今のはあくまで様子見、当てれるなんて思ってませんよ！

「くらえ！【神鳴流奥義・斬岩剣】」

ならばこちらも！

「はぁっ！【神鳴流奥義・斬岩剣】」

〔ガギィィィィン！〕

「くっ！」

同じ技でも威力は刹那の方が上ですか、まともに打ち合うのは不利です、ね！

〔ドンッ！〕

互いの剣が弾かれると同時に私は瞬動で距離を取り魔法を詠唱。

「ラ・ギア・エス・ティマ・クラウ・ディア！雷の精霊１０１柱！闇の精霊１０１柱！集い来たりて敵を射て！融合、魔法の射手！連弾・黒雷の１０１矢！」

ならば雷と闇を融合させ威力と速さを増した魔法の矢です！

「神鳴流奥義…【百烈桜花斬】」

〔キィィィィン〕

なっ！百烈桜花斬で全て防がれた！？

「はっ！【神鳴流奥義・斬空掌・散】」

【Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ】

防御を！同時にディバインスフィア形成！

〔ガガガガガガッ！〕

【Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ】

防ぎきると同時にアクセルシューター４発射出！

「くっ！」

〔ドンッ！〕

回避した直後の体勢の崩れた所へ瞬動で接近、これなら！

【神鳴流奥義・雷鳴剣】

「ちっ！【桜楼月華】」

〔パァン！〕

うぅ…これも防がれるとは…こうなったら上級魔法か砲撃魔法ぶっ放つしかないですかね？

「はぁ…はぁ…流石刹那です、正直予想以上、ですよ…」

「はぁ…はぁ…詩音もな、今まで見た事も無い、魔法には驚かせて、

もらった」

距離を取って呼吸を整えます、お互い息切れしてる所為で変な所で言葉を区切ってますね…。

体力魔力共にまだ余裕は有りますが、長引かせると地力の差が出てきますし…一気に決めにいきますかね！

「もっと驚いてもらいますよ！ラ・ギア・エス・ティマ・クラウ・ディア！闇の精霊１９９柱！火の精霊１９９柱！集い来たりて敵を射て！融合、魔法の射手！連弾・黒炎の１９９矢！！」

「はぁぁぁぁっ！【神鳴流奥義・真・雷光剣】」

〔ドガァァァァァン！〕

防がれるのは予想済み、本命はこれです！

「ロッドモードチェンジ、カートリッジロード！」

刀から杖に変えて直ぐ様カートリッジを2発ロード、魔力充填！これが管理局のエースオブエースが生み出した魔法！

「これで終わりです！ディバィィィン…バスター！！【Ｄｉｖｉｎ Ｂｕｓｔｅｒ】」

黒煙の隙間から刹那の姿を確認すると共に、私は発動ワードを紡ぎ白銀の閃光を放つ。

黒煙を吹き飛ばし、圧倒的な破壊力を持つ白銀の閃光が止んだ後、刹那の姿を探しますが…居ない！？

「勝利を確信するのはまだ早いぞ詩音！【神鳴流奥義・浮雲・旋一閃】」

「うわっ！？」

…

……

……

「…ん」

「目が覚めたか」

「おはようございます」

「おはよう、大丈夫か？」

「ええ、何とか。私の負けですね」

浮雲・旋一閃を食らったまでは覚えてます、あれで気を失ったんですね。

「ああ、しかし今回は本当驚かせもらってばかりだ」

「とっておきだったんですけどね～」

「最後のアレは…直撃すると間違い無くやられてたぞ…」

「あぁ、心配しなくてもアレはそれほど酷い怪我にはならないはずです」

「そうは見えないんだが」

ミッドチルダ式魔法は非殺傷設定にしてますから。
それよりも飛行魔法使わなかったとはいえ、本気出して負けるとは…あぁーもう！しかも敗因が詰めの甘さってのがまた！お母さんとの勝負でもそれが原因で負ける事が多いというのに私って奴は！

「お、おい、何かすごく落ち込んでるが本当に大丈夫か？」

「あはは～大丈夫ですよ～、自分の詰めの甘さに嫌になってただけですから～」

あはははは～と、私の乾いた笑いと共に日が暮れていきました。

―夜

時計の針も１０時を回った頃、私は刹那の部屋を訪ねました。

「刹那、入って良いですか？」

「詩音？ああ、構わない」

「ではお邪魔します」

回りくどいのも嫌ですし単刀直入に言いましょうかね。

「刹那は来年から麻帆良学園に転入するそうですね」

「長から聞いたのか」

「ええ」

「そうだ、木乃香お嬢様の護衛の為にな」

「刹那の強さは十分に知ってますからね、きっと大丈夫です、でも…」

「でも、何だ？」

「もし、助けが必要な時は私を呼んで下さい、直ぐに駆けつけます」

中継点設置すれば何とでもなりますし。

「いや、しかし…」

「巻き込みたくない、とかアホな考えしてるなら余計なお世話ですよ」

「アホ！？」

「刹那は私の大切な友人です、余計な気遣いは無用。刹那も私を友人と思ってくれてるのなら少しは頼りにして下さい、微力ながら力になれます」

にぱーっと満面の笑みを刹那に向けます。

「うっ！…分かった、詩音の実力は申し分無いし、何より…友達だからな」

「ありがとうございます♪」

好意の押し付けっぽくなりましたが、これでいざというとき頼りにしてくれるのなら些細な事です。
まあ学園には龍宮隊長や楓もいますし、少なくとも修学旅行までは特に大きな問題も無いはず。

「用件はそれだけです、そろそろ部屋に戻りますね」

「ああ、おやすみ」

「おやすみなさい、明日は勝たせてもらいますよ」

「私も負ける気は無いぞ」

「「…」」

「「ふっ」」

お互いに小さく笑い合い、私は部屋を後にしました。

5時間目終了時点での設定（前書き）

おまけみたいなものです。

5時間目終了時点での設定

結崎詩音（ゆいざきしおん）

５時間目終了時点で１２歳、小学６年生の女

転生により前世の記憶を引き継いでる、その中にはデバイスマイスターとしての知識もあるのでこの世界でデバイスを制作する。
自称神のおかげで身体能力は高く、鍛え方次第で某機動戦士に出てくるスーパーコーディネーター並のチートボディ。
魔力保有量は時空管理局基準でＡＡ＋からＡＡＡ－に、今後も成長と修業により増加する可能性有り。
神鳴流の修業により、気も多少は扱えるが魔力の扱いの方が向いてるので、あくまで魔力が尽きた時の保険程度にしか考えてない。

得意な属性
光＞雷＝風＝火＞闇＞＞それ以外
治療魔法はネギ以上木乃香以下。
ミッドチルダ式の転移魔法と飛行魔法が使える。

趣味
デバイス開発・改造
魔法具開発
新魔法開発

デバイス
Ｎａｍｅ：ソウルオブリバース（Ｓｏｕｌ　ｏｆ　Ｒｅｂｉｒｔｈ）
Ｔｙｐｅ：ストレージデバイス（カートリッジシステム搭載型）
元々の形状は杖だが神鳴流を習ってから刀の形状を追加、待機時は

カードになる。
カートリッジは８発装填可能。
バリアジャケットのイメージはＦＦのジョブである『導師』（但しフードに猫耳は無い）、ローブの下は八神はやてのバリアジャケット（黒っぽい服だけの状態）をイメージしている。

6時間目「うっかり詩音さん」

―数日後

この日はいつもより早めに修行を切り上げ、私と刹那は京都の街を特に予定も無くぶらつく事に。
暫く何事も無く街を歩いてたのですが、１０分程前から誰かの視線を感じるようになりました。

「刹那、気付いてますか」

「ああ、先程から尾けられてる」

恐らく関西呪術協会の一部の手の者だと思いますけど、狙いは西洋魔術師の私なのか裏切り者の刹那なのか…。
どちらにせよこのまま尾けられっぱなしというのも気分が悪いですね。

「二手に別れて様子を見るか」

「分かりました、では後程本山で」

刹那の案に従い私達は二手に別れる事にしました。

―数分後・林の中

どうやら狙いは私のようですね…仕方無い、戦りますかね？ここなら人目に付きにくいでしょうし。

「いい加減姿を現したらどうですか？」

「…なんや、やっぱ気付いとったんか」

ん？この人は確か…天なんとかって人だったような…ん～、名前が思い出せませんが修学旅行で木乃香誘拐の主犯の女でしたね。

「どうして私を尾けまわすのか、理由を聞いても良いですか」

「何、大した理由やありまへん、ここ数年いけすかん西洋魔術師が本山に出入りしとるようなんで調べさせてもらってただけどすえ、結崎詩音はん」

流石に私の張った結界の内部の事まではバレて無いはずですが、あまり調べられるのも面倒ですね。

「あんまり京都でチョロチョロされるんも目障りやから、ちょっとばかし痛い目見てもらおうかと思いましてな」

「戦り合う気ですか？簡単にやられるつもりは無いので抵抗させてもらいますよ」

「何やけったいな結界張られてる所為で、アンタの実力までは分からんかったけどまだ小娘、大した事無いですやろ」

完璧舐められてますね…ちょっとイラッとしましたよ。

「そろそろいかせてもらいますえ。お札さんお札さん、ウチを助けておくれやす【猿鬼・熊鬼】」

「こちらもいかせてもらいますよ」

デバイスを使いますかね、バリアジャケット展開しなければマジックアイテムで誤魔化せそうですし。
そう思い、私はデバイスを取り出しそうとポケットに手を入れ…あ、あれ？無い？

「いけっ！猿鬼、熊鬼！」

ちょ！まずいですよこれは！デバイス部屋に置き忘れてきた！はっ、予備の杖を…って、これも置いてきたんでした！

「た、タイム！」

「待ちまへんえ！」

デバイスの補助が無いとシューターも２つまでしかコントロール出来ませんが仕方無い！

「っ！このっ！【Ｄｉｖｉｎ　Ｓｈｏｏｔｅｒ】」

襲いかかってくる式神に対してディバインシューター２発射出！

「んなっ！？」

〔ドガン！〕

直撃！どうですか？

「なんや驚かせよってからに、でもやっぱ西洋魔術師なんか大した

事おまへんな」

シューターの威力も下がってるーーー！！

本来ならあの程度の式神、一撃で倒せる位の威力はあるはずなのに！

「くっ！」

気で肉体強化しつつ、敵の攻撃を捌いてますがこのままでは不味い…って、よく考えたら別に戦う必要性も有りませんし…逃げますか。

「そこの眼鏡！ここは一旦退かせてもらいます、ではサラバ！」

そう言い放って私は連続瞬動でその場を後にしました。

後ろから「眼鏡言うな」「逃げるな」とか聞こえてきましたが、敵にそう言われて逃げるのを止める人間いませんよ。

今回の事は屈辱ですが、いずれ借りは返しますよ、天なんとか！

―夜・本山

「ははははは、そ、それで逃げて来たのか」

「わ、笑わないで下さい！」

武器を忘れた事を刹那に話すと笑われました、そんな笑わんでも良いでしょうに。

「しかし狙いが詩音の方とはな、可能性としては私の方が高いんだが」

真面目な顔で話し出す刹那、私も真面目モードに切り替えますか。

「関西呪術協会と関東魔法協会…西洋魔術師は仲が悪いのは知ってましたが、まさか襲われる事になるとは思いませんでしたよ」

「この事は長にはもう話したのか？」

「相手は自分の身元を言った訳では無いですからね、あくまで私達がそう思ってるだけ、という事にしときましょう」

「だがこのまま放っておくとまた狙われる事になるぞ」

「分かってます、それに今度は武器を忘れたりしませんから大丈夫ですよ」

あの眼鏡、今度会ったらディバインバスターをお見舞いしてあげます、障壁貫通バージョンなので生半可な防御しても無駄ですよ、ふっふっふ。

「その笑い方、怖いからやめてくれ」

顔に出てましたか…。

「今度京都に来る時は、県境辺りから空飛んで来た方が良いかも知れませんね」

「詩音は浮遊術が使えたのか？」

「使えますよ、もっとも浮遊術では無く飛行魔法という分類になりますが」

「なら何故、修業の時に使わない」

「刹那は飛べないのに私だけ飛んだら不公平じゃないですか」

「あ…、いや、そうか、そうだな」

「刹那？」

「何でも無い…」

原作を知ってる私からすれば、刹那が烏族とのハーフで空を飛べる事を知ってますが追求は出来ません、これは刹那が自分から言わなければいけない事でしょうから…。

「詩音」

「何ですか？」

「いつか、聞いて欲しい事がある、今は話せ無いがその時まで待っていて欲しい」

「…分かりました、ただこれだけは覚えておいて下さい、どんな秘密があろうと私は刹那を受け入れます」

「ありがとう…」

今はただ、その時が来るのをゆっくりと待つだけです。

7時間目「そうだ麻帆良学園、行こう」（前書き）

前話の事ですが、京都弁がよく分からなかったのでかなりおかしいですが許して下さい。

7時間目「そうだ麻帆良学園、行こう」

京都での修業を終え、家に帰ると衝撃の事実が待ってました。兄達が何故か魔法に目覚めてしまったのです。

ｏｈ…

話を聞いてみると、私の部屋の机の上に置かれてた練習用の杖を使って、魔法使いごっこをしてたら本当に魔法が出てしまったという恐ろしくアホらしい理由でした…というか勝手に部屋に入るな！後、いい歳して魔法使いごっこするな！

ちなみに唱えた呪文は「メラゾーマ」だったそうです、でもライター程度の火しか出なかったので一安心。

家族会議の結果、兄達も魔法使い（見習い）として修業に参加する事になってしまいました。

―後日・結界内

「愚兄よ、俺の魔法の射手食らってみな」

「よかろう愚弟、しかし我が障壁を抜けると思うてか？」

こ、このバカ兄達は…、魔法に関する危険性を十分説明したのにお遊び感覚でするなと…。

「お兄ちゃん！【Ｄｉｖｉｎｅ　Ｓｈｏｏｔｅｒ】」

「「ぐはっ！？」」

威力は最低に落としてます、しかしそれで破壊される障壁とは…。

「真面目にやる気無いなら帰って下さい」

「「ゴメンナサイ」」

罰としてこの日はバインド系魔法の実験台になってもらいました。
京都から帰った後、前回の失敗を反省し、デバイスに頼らず使える魔法を増やす事にしました、そこで思い当たったのがバインド系の魔法なのですが何故今まで失念してたのか…。

「ではいきますよ、チェーンバインド！【Ｃｈａｉｎ　Ｂｉｎｄ】」

光の鎖が兄を締め付けます。

「ああっ！もっと！」

「てめぇ！ずるいぞ！」

泣きたくなってきた…。

こんなアホな修業もたまにやりつつ時は過ぎ、私は中学生になりました。結局母には１勝も出来ません。
私はそのまま地元の私立中学へ、刹那は予定通り麻帆良学園に通う事になり、今までみたいに夏休みに京都に行けば会えるという訳にはいかなくなりました。
中学１年の夏休みは京都に行かず、両親と実戦訓練をやりました、兄達はその光景をポカーンと見てるだけ、レベルの違いに言葉も出

ないようです。

そして更に時は流れ、中学2年になり少し経った頃。

―6月

「そうだ麻帆良学園、行こう」

リビングでゴロゴロしてると、母がまた突拍子も無い事を言い出しました。

「お父さーん、またお母さんがー」

「良いじゃないか麻帆良学園、世界樹とか学園祭とか学園長とか」

前二つはともかく学園長はどうでも良いでしょ。

そういやもうすぐ学園祭でしたね、去年はすっかり忘れてましたけど今年は行ってみたいですね。

「お母さん、私、行ってみたいんですけど」

「学園長に興味が有るの？」

「違います、学園祭に興味が有るんです」

何が悲しくて態々学園長見に行かないといけないんですか…。

「その日は学校も休みだし丁度良いわね」

という訳で学園祭に行く事になりました、刹那の様子も見れるし楽

しみです。

―学園祭当日

「そういう訳で行って来ます」

「ま、待ってくれ詩音！俺達を置いて行かないでくれ！」

当日まで私と母が学園祭に行く事を知らなかった兄達は仕事の予定を入れており参加不可。なので私を引き止めようと兄達が足にしがみついてきて離してくれません、正直ウザいんですが…。

「お土産買ってきますから、お兄ちゃん達は仕事頑張って下さい」

「「イ・ヤ・だ！」」

子供ですかアンタ達は、仕方無いのでちょっと眠ってもらいましょう。

「ていっ」

〔バチッ！〕

「「がっ！？」」

無詠唱で呪文を唱え、雷を手に宿し兄達を気絶させました、まったく手間が掛かる。

「さて、それでは今度こそ行きましょう」

「ええ。それじゃお父さん、後よろしくねー」

「行って来まーす」

「2人共楽しんでおいで」

こうして私達は麻帆良学園祭へ行く事になりました、初めての学園祭に年甲斐も無くワクワクしてます。

「お母さんも久しぶりだから楽しみね～学園祭、そして学園長」

「だから何故学園長…」

それよりも他の2-Aメンバーに会ってみたいものですよ。

８時間目「ｖｓタカミチ」

「ふぉっふぉっふぉ、君がレイラ君の娘さんか、レイラ君の若い頃に似て可愛らしいの～」

「は、はぁ…」

何でこんな事にー！？

無事に麻帆良学園に到着した私は意気揚々と学園祭を楽しむつもりでした。しかし母が「久しぶりだし先に学園長に挨拶しにいきましょう、詩音ちゃんの顔見せも兼ねて♪」などと言い出し、強制的に学園長室に連行され今に至る訳なのですが…。

「いやですわ学園長、私は今でもまだまだ若いつもりですよ」

「確かに、学生時代とほとんど変わっておらんの」

母は４０台後半のくせに外見年齢は２０台前半、ヘタすれば１０台後半で通用する位の若々しさですからね、学園長室に来るまでにも姉妹と間違われナンパされましたし…。

前世のリンディ提督もかなりのモノでしたが家の母はそれを上回ります、これこそ真のチートボディと呼ぶべきではないでしょうか？

学園長も母のあまりの変化の無さっぷりに冷や汗かいてます。

「そういえば詩音君」

「はい？」

「お母さんから聞いておるよ、その歳で中々の腕前だそうじゃの」
「そんな事有りませんよ、現に母には一度も勝った事無いですし」
「婿殿…ああ、詠春殿の事じゃ、彼からも話しは聞いておる、謙遜せんでもええ」
む、何か企んでそうな感じがしますね。
「いえいえ本当に、私なんてまだまだですから」
「それに何やら変わった魔法を使えるそうじゃな、是非この老い先短い老いぼれにも見せてくれんかの？出来れば実力を見せてもらうのも兼ねて、うちの教師の誰かと軽く手合わせしてもらえんかの～」
そう来ましたか…まぁ手の内全部見せなくても良いし受けても良いかな。
「構いませんよ、それで誰が相手何ですか？」
「先程呼んだからもうすぐ来るはずじゃ」
計画通り！という学園長の顔が頭に浮かんだので、とりあえず頭ん中で殴っておきました。
学園長の言葉の直ぐ後にドアを2回ノックする音、どうやらタイミング良く来たようですね。
「入りたまえ」
「失礼します」

ドアが開くと同時に振り返るとそこには”あの”高畑・T・タカミチがいました、中々渋いですねってタカミチが相手ですか！？

「態々呼び出してスマンの」

「構いませんよ、それでその娘ですか？」

違いますって言いたいー！

「あら、流石に高畑さんじゃ相手が悪くないかしら？」

「他の教師達は学園祭の見回り中じゃし、丁度休憩中のタカミチしか相手がおらんかったんじゃよ」

安請け合いするんじゃ無かった…。

ま、まあ、あくまで手合わせ、怪我する事は無いでしょう！

「高畑・T・タカミチだ、よろしく」

「結崎詩音です、よろしくお願いします」

「そんな固くならなくて良いよ、少し実力を見せてもらうだけだから」

「はい」

もうどうにでもなれ～。

「それで学園長、場所はどうします？学園祭でどこも人目に付きま

すよ」

「そうじゃな」

「大丈夫です、私が結界を張ります、結界内部はほぼ完全に外部と遮断出来ますから心配は要りません」

たまに事故で一般人が取り残される事が有るそうですが、宝くじ1等に当たる程度の確率の低さですから大丈夫でしょう。

「何と、そのような魔法も使えるのか」

「オリジナルです」

嘘ついてもこの世界でバレませんからね。

私達4人は敷地内の広場へ場所を変える事にし、学園長室を後にしました。

―フィアテル・アム・ゼー広場

人が結構居ますが結界張れば問題無いでしょう。

「封時結界、展開」

周囲の色が変化し、結界が張られたのを確認。

「ほぅ…」

「ルールはどうします？」

何やら感心している学園長に訊ねてみる。

「あくまで手合わせじゃ、お互いに大怪我せん程度の範囲なら何でも有りにしよう、それで良いかの？」

「分かりました」

「僕もそれで構いませんよ」

では戦闘準備をしますか、私は胸ポケットからデバイスを取り出し起動ワードを唱えます。

「ソウルオブリバース、セットアップ！」

銀色の光が止み、バリアジャケットを身に纏い右手に杖を持って戦闘準備完了！

「ほう、魔力で編んだ防御服か」

「パクテイオーカードでもアーティファクトでも無いようだね、初めて見るよ」

「学園長、高畑さん、こちらは準備オッケーです」

学園長はあまり驚いた様子は無いですがタカミチの方は少し驚いてるみたいですね。

「こちらも準備は出来てます。学園長、合図をお願いします」

両手を上着のポケットに入れるあの構え…。

「ふむ、それでは…始め！」

【Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ】

〔パパパパパパン！〕

開始合図と同時にオートプロテクションが作動、見えない何かがぶつかる音、やはり居合い拳ですか！

「へぇ、今のを防ぐか」

「生憎その程度で破られる程やわな障壁じゃ無いです、よ！【Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ＋】」

居合い拳を撃ち終わったタカミチに対しアクセルシューターを８つ射出、まずはこれで様子見です！

「魔法の射手？いやこれは！」

私の放った８つの高速自動誘導型アクセルシューターを回避しつつ、それでも確実に１つずつ迎撃するタカミチに向かって障壁を展開したまま瞬動で接近。

「いきます！【Ｆｌａｓｈ　Ｉｍｐａｃｔ】」

「ぐっ！？」

【Ｆｌａｓｈ　Ｍｏｖｅ】

フラッシュインパクトを腕でガードされたものの、衝撃で２ｍ程後方へ飛ばされたタカミチに更にフラッシュムーブで接近し、もう一度フラッシュインパクトを放つ。

【Ｆｌａｓｈ　Ｉｍｐａｃｔ】

「二度は食らわんよ！」

当たる瞬間、瞬動で避けられそのまま距離を取られる。

「居合い拳も効かないしこのままじゃマズイかな」

「高畑さん、まだ何か隠してるでしょ、使ったらどうですか？ちょっと位の怪我なら気にしませんから」

咸卦法が実際どれ位か見てみる良い機会ですし、試してみますか。

「ならお言葉に甘えて…遠慮なく使わせてもらおうかな…左腕に『魔力』、右腕に『気』」

〔ゴッ！！〕

「っ！凄い力！」

これが咸卦法ですか！とんでもない力じゃないですか！

「避けるか全力で防御した方が良いよ」

「受けて立ちますよ」

「なら、いくよ！【豪殺居合い拳】」
プロテクションじゃ強度が足りない、ならこれで！
【Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ×４】
〔ゴンッ！〕
ラウンドシールド４層障壁、これならどうです！
「むっ！」
〔パリィン、パリィン、パリィン〕
３枚破られた！？でも！
「っぅー！…防ぎきりましたよ」
「お見事、だが連射も出来るんだよ【豪殺居合い拳】」
「ちっ！【Ｆｌａｓｈ　Ｍｏｖｅ】」
豪殺居合い拳の連射をフラッシュムーブでギリギリかわす。
「いけっ！【Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ】」
タカミチの攻撃を避けつつ、何とかアクセルシューターを４つ放つ。
「むっ【豪殺居合い拳】」
しかし一撃で全て落とされる、更に豪殺居合い拳で追い討ちを掛け

ようと攻めてくるのを瞬動とフラッシュムーブで何とかかわすも徐々に追い詰められていくのが判る。

「避けてばかりでは勝てないよ【豪殺居合い拳】」

「くぅっ！」

回避仕切れない一発がボディに入り吹き飛ばされる。
バリアジャケットが無かったら危なかった…。

「ふぅ…どうする、まだ続けるかい？」

「ま、まだ諦めませんよ、せめて一撃食らわせるまではね【魔法の射手・火の９矢】【Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ】」

マルチタスクによる無詠唱の魔法の射手とアクセルシューター６つを同時に射出、初めての試みですが上手くいきました。
魔法の射手は直線的に、アクセルシューターは大きく弧を描くように誘導、時間差で多方向から攻める。

「む、だがこの程度」

魔法の射手は通常の居合い拳で、威力の高いアクセルシューターは二度の豪殺居合い拳で全て消されましたが一瞬でも気を逸らせれば十分です！

【Ｏｐｔｉｃ　Ｈｉｄｅ】

「消えた！？」

姿を消した上で瞬動で接近、タカミチ相手に2度は通じないでしょうが1度だけなら！

「終わりです【Ｓｔｒｕｇｇｌｅ　Ｂｉｎｄ】」

密着状態からのストラグルバインド、流石の咸卦法も少しは押さえ込む事が出来るでしょう。

「ぐぅっ！これは！？」

「対象の動きを拘束と同時に強化魔法を強制解除する魔法です、高畑さんとはいえ直ぐには解けないはず」

私は杖をタカミチに向け構えます。

「これで決めます！ディバィィィンバスター！！【Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ】」

白銀の閃光がタカミチを呑み込む、閃光が止んだ後には倒れたタカミチの姿がありました。

「ふむ、そこまでじゃ」

「ふぅ…高畑さん、大丈夫ですか？」

倒れたタカミチに声を掛ける。

「何とかね。しかし凄い威力だったにも関わらず外傷がほとんど無いのが不思議だ」

「あれは殺傷目的では有りませんでしたから、その辺は考慮してます」

「それにしてもまさか負けるとは思わなかったよ、強いね」

「いえ、高畑さんが手加減してくれてたのは分かってます、だからこそあそこで負けを認めたく無かったんですよ」

「はははっ、意外と負けず嫌いなんだね」

「母に似たんでしょう」

そう言ってニッコリと微笑み返しました。

「学園長、満足して頂けましたか？」

「ふぉっふぉっふぉ、十分に満足させてもらったよ、戦闘技能もまったくその歳で見事なものじゃわい。ところで詩音君、君の使った結界、補助、防御、攻撃魔法について詳しく教えてはくれんかの？」

「それに関してはノーコメントです、態々手品のタネをバラすマジシャンは居ないでしょう？」

教えたところで使えない理由も有りますしね。

「それは残念じゃの。ところでこの後はどうするつもりじゃ？」

「元々学園祭を楽しむつもりで来たんですが…」

それが何故かタカミチと戦う事になるなんて…。

「それは失礼した、では学園祭を心行くまで楽しんでおくれ」

「はい、それでは失礼します」

こうして私の初めての麻帆良学園祭はちょっとした波乱から始まりました。

9時間目「刹那と木乃香」

学園長達と別れた後、私と母は出店巡りをしつつ刹那を捜してたのですが、流石にこの人ゴミの中で個人を捜すのは不可能に近く諦めました。
ちなみに捜してる最中に規模は小さいですが格闘大会とコスプレコンテストに出ました、母の命令には逆らえません…。
格闘大会の方は私にとってはお遊び程度のレベルで問題無く優勝。
コスプレコンテストの方はデバイスのバリアジャケットの設定を弄り『魔法メイドマジカルこのは』というアニメの『仲町このは』という主人公キャラの衣装（白を基調とした改造メイド服）で出てみたところ大盛況。
結果はなんと優勝、羞恥心を完全に捨て去りノリノリでポージングまでやった甲斐が有るというものですよ。

「リリカルマジカルご奉仕します♪可愛かったわね～♪」

「お願いもう言わないで…」

こうして私の心に大ダメージを与えたものの、２つの優勝賞金を合わせた２０万円を懐に入れる事が出来ました。

その後、日も沈みかけた頃、私達は休憩する為世界樹前広場に向かう途中見知った背中を発見、声を掛ける事に。

「ストーキングですか？」

「違う！って詩音？それにおばさ…レイラさんも」

「刹那ちゃん久しぶり～、今何て言おうとしたのかしら～？」

「い、いえ！何でも無いです！」

母のプレッシャーを感じたのか慌てて誤魔化す刹那、気持ちは分かります。

「ところで何コソコソしてるんですか？怪し過ぎますよ」

「お嬢様の護衛だ、この人ゴミに紛れてお嬢様に近付く輩がいるかもしれないからな」

広場のベンチの方を見ると木乃香とアスナが座ってました、しかし今の刹那を傍から見ると完璧にストーカーなんですが…。

「ところで2人は何時こちらに？」

「お昼頃よ、そうそう聞いて聞いて！詩音ちゃんコスプレコンテストで優勝したの！」

「こ、こすぷれ？」

「気にしないで下さい、本当気にしないで下さい…」

「リリカルマジカル～♪」

止めて！私のライフはもう0よ！

家に帰ったら兄達にも言いかねませんね…口止めしとかないと。

「ほら、その時の写真」

「ちょ！？」

「あ、可愛い…」

撮るな見せるな見るな！

「それと高畑さんと戦って勝っちゃったのよ」

「ええっ！？」

正直コスプレコンテストよりこっちの方が驚きですよね。
しかし母の中では【コスプレコンテスト優勝＞高畑さんに勝利】の図式の様です。

「かなり手加減されてましたけどね、じゃないと勝てませんよ」

「いや、それでも高畑先生に勝つとは…」

「運が良かった、という事にしといて下さい。それより、何故こんな形で護衛してるんですか？幼なじみなんですから普通に一緒に居れば良いのに」

「…私に、お嬢様の側に居る資格など無い」

木乃香も刹那と一緒に居たいと思ってる、刹那だって本当は木乃香の側に居たいはずなのに。

「あら？木乃香さん居なくなってるわよ」

「「え？」」

母の言葉に反応し、木乃香達が座ってたベンチを見ると既に移動したのか誰も居ません、話しに気を取られ見失ってしまいました。

「しまった！すぐに捜さないと！」

「スミマセン、仕事の邪魔してしまったようで」

「気にするな。では2人共、私はお嬢様を捜すので失礼します」

「はい、それではまた」

「頑張ってね～」

手を振り刹那と別れた頃には日は完全に沈み、祭の明かりが学園を照らしてました。

「これからどうします？」

「お母さんは学園長とお酒を飲む約束してるけど、詩音ちゃんはどうする？」

「私にお酒の席はまだ早いですから遠慮しときます、別に1人でも大丈夫なのでお母さんは気にせず学園長のところに行って下さい」

前世でも下戸だったので飲み会とかにはほとんど参加せず仕舞いでしたからね、この身体はお酒強くなるんでしょうか？

「ゴメンね、何かあったら直ぐに連絡するのよ」

「分かってます、ではまた後で」

母と別れ、特に目的が無いので目ぼしいイベントを捜す為ぶらつく事に。

「あの～ちょっとええですか？」

「はい、ってあれ？」

途中後ろから声を掛けられ、振り向くと木乃香が居ました、何故私に声を？

「ウチ、近衛木乃香いいます、さっきせっちゃんと一緒に居ましたよね、お友達ですか？」

「せっちゃん…桜咲刹那さんの事ならそうですよ、ところで私に何かご用ですか？あ、私は結崎詩音といいます」

お互い簡単な自己紹介をし、近くのオープンカフェで話しをする事に。

席に座り注文を済ますと木乃香が口を開きました。

「結崎さんは何時頃せっちゃんと知り合ったん？」

「7歳の時、剣の修業として母に連れられて京都の木乃香さんの実家の方に行ったその時ですね、だから木乃香さんの事は詠春さんと刹那から聞いた事が有ります。ああ後、私の事は詩音と呼んでくれて構いませんよ、刹那の幼なじみですし」

「なら詩音さん呼ばせてもらいます。そうやったんや、お父様からなんも聞いてへんかったわ」

「それで、私に聞きたい事が有ると仰ってましたがそんな事では無いのでしょう？」

「あ…うん、…あんな―」

少し答え辛そうに語り出した木乃香の話しはやはり刹那の事。
中学生になって刹那と再会出来たのに距離を置かれてる事、自分が何か嫌われるような事をしてしまったんじゃないかという不安、昔みたいに仲良くしたいという気持ちを語ってくれました。

「そんで詩音さんは何か知ってへんかなと思って」

「少なくとも刹那が木乃香さんを嫌ってるという事は有り得ませんよ。お嬢様は大切な人、お嬢様を守る事が私の全てだと言ってた位なんですから」

「そうなんや、安心したわ～、でもそれやったら何でウチを避けるんやろ…」

「その辺は刹那の不器用な性格も有りますから、強引にでも取っ捕まえて木乃香さんの素直な気持ちをぶつけたらどうですか？」

「せやな、せっちゃんとちゃんと話しして昔みたいに仲良うしたい、今のままなんてイヤや」

「頑張って下さい、私も応援してますから」

「おおきに、なんかやる気出てきたわ！」

こうして木乃香との話しを終え、カフェを後にしました。
これで少しでも関係が良くなれば良いのですが…後は本人達に任せましょう、これ以上はお節介かもしれませんからね。

木乃香と別れた後、母に連絡して合流する事に。

「詩音ちゃん、悪いんだけどちょっと妖怪退治お願い」

「は？」

合流早々ちょっとコンビニ行ってきて、みたいなノリで大変な仕事を任されました。
話を聞いてみると学園結界付近に何者かに召喚されたと思われる大量の鬼が発生、既に人は向かわせてるが数が多いので助っ人として向かって欲しいとの事。

「な、何故私が…」

「訓練は積んでるけど実戦は初めてじゃない、良い経験になると思って、ね♪」

「……」

反論しても無駄っぽいので渋々依頼を受ける事にしました、ちゃんと後で請求しますからね！

「ソウルオブリバース、セットアップ」

【Ａｃｃｅｌ　Ｆｉｎ】

デバイスを起動して現場まで空を飛んで行こうとアクセルフィンを発動。

「頑張ってね～」

母の応援を背にこの場を後にしました。

１０時間目「はじめてのぎゃくさつ」

現場までかなりのスピードで飛び続ける事数分、結界の端にある山の麓に遠目からでも判る量の敵の集団、ざっと見７～８０匹の鬼が目に付きました。
この量を１人で召喚するのは無理が有りますね、修学旅行の時は木乃香の魔力を使って大量に呼び出した訳ですし術者は最低でも３人は居そうですね。
しかしまずは先に来て戦ってる仲間を探すと同時に術者の位置を探る為、複数のサーチャーを飛ばし詮索すること数秒。

「見つけた、あれは…刹那と龍宮隊長…ですかね？銃使ってますし」

刹那達を見つけてから更に数秒後、術者の位置を把握。
とりあえず刹那に近づき空から声を掛けるとこちらに気付きました。

「詩音！助っ人とはお前の事だったのか」

「そうですよ、ところで敵の強さは？」

「一体一体は雑魚だが数が多い！倒しても新たに召喚されてキリが無い！」

私の問いに対し、敵を相手にしながら龍宮隊長が答えてくれました。
この数の雑魚をちまちま倒しても術者の魔力が続く限り呼び出される訳ですし…うん、広域魔法で術者ごと一気に殲滅した方が手っ取り早いですね、そうと決まれば…。

「２人共、後１５秒程敵の相手をお願いします！広域魔法でまとめ

て倒しますから！」

「「分かった！」」

高度はそのままで敵に近づきカートリッジを４発ロード、詠唱を始めます。

「アルカス・クルタス・エイギアス。煌めきたる天神よ。いま導きのもと降りきたれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル。撃つは雷、響くは轟雷。アルカス・クルタス・エイギアス」

敵の上空に雷を纏った黒雲が生み出され徐々に大きくなっていく、そしてそれは全ての敵を覆う程の大きさにまで育つ。
それはつまり私の魔法の射程内、何人足りとも逃がしません！

「２人共下がってて下さい！いきますよ！」

刹那達が後方に下がった事を確認し私は最期の言葉を唱える。

「サンダーフォール！【Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｆａｌｌ】」

空を切り裂く無数の光の直後、耳をつんざくような轟音が鳴り響き、雷が全ての敵を撃ち貫く。

「な、何て魔法だ…」

「すごい…だがやりすぎだろ…」

刹那は驚き龍宮隊長は呆れた様子で敵が居た場所を見つめる。

いやね、正直カートリッジ４発も使ったのは私もやり過ぎたと思いますよ、ただ慣れてない魔法だったんで念の為多めに使った結果がアレな訳でして…術者死んでませんよね？人殺しなんてイヤですよ？非殺傷設定でも限界を大きく超えると死んじゃうんで。

「ま、まあ敵は殲滅出来たし結果オーライという事にしましょう！」

「そうだな、後は術者を捕らえて学園に引き渡せば任務完了だ」

私達は術者を捕まえに事前にサーチャーで発見した場所に向かう事に、しかしその場では無く少し離れた場所で倒れてるのを発見しました、きっと過剰魔力のサンダーフォールのヤバさに気付き逃げようとしたんでしょうが逃げ切れなかったんですね。

ちなみに術者３人共生きてました、焦げてましたけど。

その後、捕まえた術者をチェーンバインドで纏めてグルグル巻きにし、学園まで連行している途中龍宮隊長が話し掛けてきました。

「そういえば自己紹介がまだだったな、私は龍宮真名」

「結崎詩音です、よろしく」

「よろしく。結崎のおかげで助かったよ、後少しで弾も無くなりそうだったからな」

「いえいえ仕事ですから、お互い後できっちり学園長に請求しまょう」

相場がいくら位か知りませんが龍宮隊長と同じ額を請求しましょう、第一私この学園の生徒でも無いんですから。

「結崎の事は刹那から聞いた事があるよ、一緒に剣の修業をする仲だとね」

「なら私の説明は不要ですかね。そういえば刹那、木乃香さんは見つかりましたか？」

「いや、捜してる最中に学園長から連絡を受けてこっちへ来たんだ」

「ま、一度逃げずにちゃんと木乃香さんの話しを聞いてあげて下さいな」

結局お節介っぽい事をしつつ、学園に着くまでお互いの学園生活を話しながら帰りました。

時計の針が１０時を回った頃ようやく学園に到着、予定通り学園長に犯人を引き渡し依頼料を請求、その時学園長が「ふぉっ！？」とか言ってましたがタダ働きさせるつもりだったんでしょうか？

「そういえば、山の方で大きな落雷があったようじゃがあれは詩音君の魔法かね？」

あ、結界張るの忘れてた。

ちょっとしたミスも有りましたが、一応無事に私の魔導師としての初任務は成功に終わりました。

その後、学園祭2日目3日目と特に事件も無く楽しめました。

いや、正確には些細な問題が…。

2日目、歩いてると知らない男の人に声を掛けられ「昨日のこのはちゃん萌え萌えでした」とか言われゾッとしました。

３日目には刹那が木乃香とアスナと一緒に居る姿も見られとりあえず一安心。
流石に翼は見せて無いでしょうが今の時期に距離が縮まったのは良い変化でしょう。

学園祭も終わり、家に帰ると兄達が抱き付こうとしてきたので浮雲・旋一閃を食らわせ気絶、リビングに入るとまたも悪夢が。

「な、な、なんなんですかコレは！？」

いつ作ったのか、私の学園祭でのコスプレ写真が等身大ポスターとして壁に貼られてました…。

「あの後お父さんにメールで送っておいたのよ♪」

母よ…私のライフはもう０を通り越してマイナスですよ…。

幕間「ある少女の話」

授業が終わり、部屋に帰るとパソコンの電源をＯＮにする。
起動を確認し、すぐにリンクを開くとディスプレイに映し出されているのはインターネット投票によるネットアイドルの人気投票のページ。

「ちっ…かなり追い付かれてきたな」

自身のコスプレ写真を掲載したホームページを運営し、ネットアイドルとして絶大な人気を誇る彼女、長谷川千雨には最近悩みがあった。

彼女の悩みとは二ヶ月前に現れたとあるネットアイドルにより自分の地位が危うくなった事である。

次に彼女が開いたリンク先は『シオ・スタイル』という名のホームページ。

「くそっ、今回もクオリティたけーな」

ディスプレイに映し出されてるのは『魔法メイドマジカルこのは』に出てくる主人公の親友キャラ『ヘイト・アスタロッサ』の衣装（黒を基調とした露出度の高い改造メイド服）を着たホームページの主の写真。

そのホームページの主、『シオ』と名乗る人物がネット上に初めて姿を見せたのは学園祭が終わってから少ししてからの事。
最初は１キャラのコスプレ写真しか無かった、それでもクオリティ

の高さと彼女の可愛さに閲覧者は大興奮、すぐにネット上で噂になった。

それから二ヶ月経った現在、一週間に一度新コスチュームを着た彼女の写真がホームページに掲載されると、その日のアクセス数が普段の１０倍以上に跳ね上がる程の人気ネットアイドルになったのである。

「つーか毎週毎週、こんなクオリティ高い衣装作る金どっから出してんだよ？自分で作るにしても時間たんねーだろ」

千雨は知るはずもないだろう、その衣装が無料な上、一瞬で作られた物である事など。
そしてシオがデバイスというこの時代では本来あり得ない技術で作られた物を持っている事など。
それにはバリアジャケットという魔力で構成された服がある、そのバリアジャケットのデザインを弄りさえすればどんなキャラの衣装も本物以上に本物らしく、しかも一瞬で出来る事など。

「最初は数万票の差があったってのに千票近くまで差が縮められてやがる…」

『このままではトップから引きずり落とされてしまう、何とかしないと』そんな考えが彼女の頭を過る。

実は今までにも手は打っていた、いや、正確には手を打とうとしたのだがことごとく失敗していたのだ。
千雨は知らないが、理由はシオの持つデバイスによるネットワークへの介入、その力の前に千雨の独自プログラムなど無力に等しかったのである。

「小細工が無理なら正々堂々、コスプレで挑んでやるよ！」

シオというイレギュラーな存在により、長谷川千雨という少女が今まで以上にコスプレ（とフォトショによる修正）に力を入れる事になろうとはシオ本人は知るよしも無かった。

少し時間を遡り、ところ変わって結崎家では。

「ほらほら詩音ちゃん、今度はこのアニメのキャラなんてどう？」

「もう勘弁して下さいよ…」

「お母さんが勝ったら新作衣装を着る約束じゃない」

学園祭から帰った後、詩音の母レイラはホームページを立ち上げようとした。

そのホームページの名前は『シオ・スタイル』

レイラの娘詩音のコスプレ写真をメインとしたサイトである。

もちろん詩音本人は激しく拒否、しかし母の前に彼女の力は無力だった。

だが母も「無理矢理やらせるのはあまりにも可哀想」と思い条件を出した、その条件とは『母が勝ったらサイト開設、負けたら無かった事に』という条件。

今まで勝った事が無い母に勝つなど無茶な条件、しかし僅かな可能性に掛け詩音はその条件を呑んだ。

結果は惨敗、ホームページは開設される事になり、詩音はシオという名前のコスプレイヤーとして写真はネット上にアップされる事になった。

それからも週一で『詩音が勝ったらサイト閉鎖、母が勝ったら新作衣装を着てその写真をホームページにアップする』という条件で勝負をしているのだが未だに母には勝てず写真を撮られるハメになっている。

「確かにそうですがこれは流石に…」

実はこの前、学校の友人にホームページの存在がバレ、秘密にしてもらうよう口止めはしたが、情報というものはどこから漏れるか解らない。

そんな状態な今、これ以上の敗北は許されない、そう思い今日の勝負に挑んだのだが結果は上記の通り惨敗。

そして今は『魔法メイドマジカルこのは』の親友『ヘイト・アスタロッサ』の衣装（黒を基調とした露出度の高い改造メイド服）を手に持った母に対し最期の抵抗を試みてるところである。

結果、どうなったかは言うまでも無い。

「それじゃ例のシーンのセリフ、いくわよ」

「…はーい」

屋敷に敵が襲撃、敵に追い詰められた主の前に颯爽と現れる黒メイド、その黒メイドに対して敵が言ったセリフのシーン。

「仲間か」

「…御主人様だ」

彼女が母に勝つのはまだまだ先の事である。

１１時間目「武力による原作への介入」

自分の部屋でマルチタスクによるイメージトレーニングをしてるとドアをノックする音が二回。

「詩音ちゃん、緊急の仕事の依頼よ」

ドア越しに聞こえてくる母の声、私はドアを開け母を部屋に入れて話しを聞く事に。

「先程学園長から電話があったの、京都で事件、本山の人達が謎の少年に石にされた、その上木乃香さんも誘拐されたわ」

京都修学旅行編、フェイト・アーウェルンクス、ついにこの時が来ましたか…。

「丁度向こうには修学旅行で刹那ちゃんも居るわ、担任の教師も魔法使いで今犯人を追ってるらしいわ。学園長がもう一人助っ人を頼んでるみたいだけど、ちょっと時間が掛かりそうだから」

「分かりました、直ぐに向かいます」

ソウルオブリバースを胸ポケットに入れ、念の為杖の代わりになる指輪を嵌めて準備完了。

「気を付けなさい、今回の相手はかなり危険よ」

珍しく真剣な顔の母を見て気を引き締める。

「ええ、では行ってきますね」

私は転移魔法を唱えこの場を後にした。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「そこまでだ！お嬢様を放せ！！」

ネギ、アスナ、刹那、カモの目の前には木乃香を誘拐した犯人、天ヶ崎千草とフェイト・アーウェルンクスの姿。

「…またあんたらか」

余裕の表情で千草が言う。

「天ヶ崎千草！明日の朝にはお前を捕らえに応援が来るぞ！無駄な抵抗はやめ投降するがいい！」

「応援が何ぼのもんや、あの場所まで行きさえすれば…それよりも」

水面に降り術を唱えだす。

「オンキリキリヴァジャラウーンハッタ」

「んんっ…！」

千草が術を唱えると木乃香の身体がビクリと跳ねる。

「お嬢様！」

「このか！？」

直後、約１５０体もの鬼が現れ刹那達の周囲は完全に包囲された。

「ちょっとちょっとこんなのありなのー！？」
「やろー、このか姉さんの魔力で手当たり次第に召喚しやがったな」
「あんたらにはその鬼どもと遊んでてもらおか、ま、ガキやし殺さんよーにだけは言っとくわ、安心しときぃ。ほな」
そう言い残すと、千草とフェイトは木乃香を連れてその場を後にした。

ｓｉｄｅ　詩音

「到着っと。ソウルオブリバース、セットアップ」
転移魔法で本山の近くまで来たものの、詳しい場所までは知らないんですよね。
「ん？」
ふと視線を上に向けると遠くに竜巻が見える。
「あの竜巻は…あそこですか！【Ａｃｃｅｌ　Ｆｉｎ】【Ｆｌａｓｈ　Ｍｏｖｅ】」
アクセルフィンを発動し空へ飛び上がり、更にフラッシュムーブで最高速度で竜巻の場所まで向かう。
最高速で飛ばし続ける事約二分、竜巻の周りに群がる鬼の集団が見えました。
長距離からの先制砲撃でもいっときますか！
「カートリッジロード！」

カートリッジを二発ロードして発射体制に入る。
あ、そろそろ竜巻が止みそうですね。

「狙い射つぜ！ディバィィィン…バスター！！【Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ｅｘｔｅｎｓｉｏｎ】」

どこぞのガン○ムマイスターの決め台詞と共に長距離砲撃型ディバインバスターを発射、白銀の閃光が３０体近くの鬼を呑み込み消し飛ばしました。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「先生…このかお嬢様を…頼みます！」
「…はい！」

つい先程仮契約を済ませたネギと刹那が見つめ合う。

「そこ！何見つめ合って！…アレ何？」
「「「え？」」」

アスナの言葉に反応し、ネギ、刹那、カモがアスナの視線の先を見る、止みかけた竜巻の隙間から三人と一匹が見たのは白銀の閃光が鬼を呑み込む光景だった。

「今度は何なのよー！」
「すげぇ、軽く３０体は倒したぜ」
「今のは…まさか！」
「刹那さん何か知ってるんですか！？」

次から次に起こる展開に慌てるアスナに対し、刹那にとっては何度も目にした白銀の閃光、その使い手が近くまで来てる事を確信すると喜びが込み上げてきた。

「大丈夫です、今のは学園長の寄越してくれた助っ人、私の友人の攻撃です」

「「！」」

竜巻が止み、刹那達の前に白いローブを纏った少女が降り立つ。

「手伝いに来ましたよ」

小さく微笑み少女が言う。

「頼りにさせてもらうぞ」

ただ一言、しかしその一言には絶大な信頼が込められていた。

ｓｉｄｅ　詩音

「貴女は…」

「貴方がネギ先生ですね、此処は任せて下さい」

「え！でも！」

「元から刹那達に任せて、ネギ先生一人で木乃香さんを助けに向かう作戦だったんでしょ？」

原作読んで知ってますからね。

「何で知って…そうですけど…」

「大丈夫です、この程度の数なら私と刹那、それとそこの彼女だけ

でも倒せます、その後直ぐにそちらに向かいますから」

アスナの方を見ながら言う。

「え？もしかして私、期待されてる？」

「そのハリセン、アーティファクトですよね、期待してますよ。という訳なのでネギ先生は早く木乃香さんの処へ」

「…すみません、此処は頼みます！」

そう言うとネギ先生は杖に跨がり、空を飛んでこの場を後にしました。

「明日菜さん、落ち着いて戦えば大丈夫です、私のこの剣も明日菜さんのハリセンもこいつらと互角以上に戦う力を持ってますから」

「街でチンピラ１００人に囲まれた程度に考えといて下さい」

「それって安心して良いんだか悪いんだか…それよりアンタ、さっきの銀色ビームもう撃てないの？」

銀色ビームて。

「撃てますよ、それとアンタじゃなく結崎詩音です、呼び方は詩音で構いません」

「私は神楽坂明日菜、明日菜で良いわ」

「おーいもう攻撃してもええか？」

「あ、すいません」

鬼達律儀に待ってくれたんですね。

「刹那、アスナさん、先に雑魚を蹴散らします、私が合図をしたら出来るだけ高く跳んで下さい」

「何をする気なの？」
「見れば分かりますよ、二人は少しばかり敵の相手をお願いします。あ、刹那は明日菜さんを抱えて跳んで下さい、まだ魔力の扱いに馴れてないようですから」
「任せろ」
「しょーがないわね、じゃあまぁ刹那さん…鬼退治といこーか！」
「はい！」

二人が鬼達と戦ってくれてる間に私も準備しますかね。

「カートリッジロード」

カートリッジを四発ロード。

「モードチェンジ、ツインロッド」

この魔法の為、新しく追加したツインロッドモード、杖を真ん中で分けて二本にしただけなんですけどね。

足元に魔法陣が展開され、二本の杖を左右の敵に向ける。

「いきますよ！」

私の合図に反応し、二人が跳んだのを確認すると魔法を唱える。

「ローリング・ディバインバスター！！【Ｒｏｌｌｉｎｇ　Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ】」

自分を中心に一回転しながらディバインバスターを放つ、ぶっちゃけローリングバスターライフルのパクりです。

「「「「「「ぐあぁぁぁぁぁぁ！！」」」」」」

白銀の閃光に呑み込まれ消滅していく鬼達、今ので多分９０体程度の雑魚は倒したはず。

「一瞬で半分以上倒しちゃうなんて…」

「随分と腕を上げたな…」

「もう少し倒したかったところですけどね、後残ってるのは…」

「ああ、別格の奴等だけだ」

見るとやはり残ってるのは烏族、狐女、大型鬼等の別格と呼ばれてる奴等、上手く避けたか他の雑魚が盾になってたみたいですね…。

「アスナさん気を付けて下さい、こいつらは先程の雑魚とは違います」

「りょーかい」

ここからは接近戦と射撃でいきますか、素早い相手に溜めの必要がある砲撃魔法は当てにくいですし。

「ソードモード、チェンジ」

そう思い杖から剣に変える。

「それと【戦乙女の輪舞曲】」

【戦いの歌】を元に改良を重ね強化した、近距離用オリジナル身体強化魔法を唱え剣を構える。

「私は狐女と戦ります、アスナさんだとあのスピードに付いていくのは厳しいかもしれませんし」
「なら私は烏族を」
「じゃあ私はあのデカイ奴！？」
「他の二つに比べると速さが劣るぶんマシかと、それにアスナさんのハリセンは当たりさえすれば一発でアウトなんで適材かと思いますよ」
「分かった、やってやるわ」
「来ますよ！」

襲いかかってくる敵の攻撃を捌きつつ、こちらの攻撃を確実に当てていく。

「くっ！やるな嬢ちゃん！」
「貴女も中々の速さですが私の母に比べると遅すぎますよ【Ｆｌａｓｈ Ｍｏｖｅ】」
「なっ！？ガハッ！」

喋りながらもフラッシュムーブで背後に回り込み、そのまま斜めに切り捨てる。
直ぐ様襲いかかる次の敵達に対して私は１２個のアクセルシューターを放ち頭を撃ち抜く。

「ぐあぁぁっ！！」
「バカなっ！？」
「だから言ってるでしょ、遅すぎると」

こちらは倒しきりましたね、アスナさんの援護に向かいますか、刹那の方は大丈夫でしょうし。

「っ！あの光の柱は！？」

烏族を相手にしている刹那の声に気付き、そちらを見ると巨大な光の柱が見えた。

「くっ、やはり間に合いませんでしたか！」

「どうやらクライアントの千草はんの計画が上手くいってるみたいですなー」

背後から聴こえる声に振り向くと白いゴスロリ（甘ロリ？）っぽい服に身を包んだ月詠の姿があった。

「あの可愛い魔法使い君は間に合わへんかったんやろかー？まあ、ウチには関係ありまへんけどなー、刹那センパイ」

「月詠！？くそっ！」

「それにそちらのお姉さん、お姉さんとも戦ってみたいわー」

目を付けられた…？いや、それよりも無理にこいつの相手をする必要は無い、鬼の大半は倒したし、ここは刹那とアスナさんを連れて空に離脱すれば…よし。

「私は貴女に興味無いんですけどね！【Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ】」

アクセルシューターを１２個放ち誘導、刹那とアスナさんが相手にしている鬼達の頭を正確に撃ち抜く。

「二人共こちらへ！」

私の近くに来た二人の手を掴む。

「飛びます、放しちゃダメですよ」
「うん！」
「逃がしまへんえー」

銃声が聴こえ迫り来る月詠に当たる、剣で塞がれたものの一瞬の隙が出来、その隙に一気に空へ飛翔する。

「龍宮さんありがとうございます！」
「気にするな！良いから行け！あの可愛らしい先生を助けに！」

銃撃の主である龍宮隊長に礼を言い、全速力で光の柱へ向かいました。

12時間目「鬼神降臨」

「龍宮さん一人に任せて大丈夫なの？」

空を飛んで儀式が行われてる場所まで行く途中、アスナさんが心配そうに聞いてきた。

「龍宮とはたまに一緒に仕事をする仲で、その腕は本物です」

「それに一人じゃ有りません、もう一人チャイナ服を着た人も居ましたが、あの人も中々の使い手のようでしたし心配無いでしょう」

「チャイナ服って、くーふぇも来てくれたんだ」

原作通り、いや、原作よりも早い展開でネギ先生と合流出来そうですね、まだリョウメンスクナ復活してませんし。

それにネギ先生も雷の暴風一発分の魔力を使わずに済んでるし、刹那とアスナさんもほとんど無傷で体力も十分余裕有りますから状況は原作に比べてマシと考えて良いでしょう、ただやはりフェイトだけはエヴァが来ないと厳しいですが。

とりあえず、念の為二人には先にネギ先生の所に行ってもらいましょう。

「刹那、アスナさん、パクティオーカードを使ってネギ先生に念話を、カードの機能を使ってネギ先生の所へ召喚するように伝えて下さい」

「ん？明日菜さんはともかく、何故私がネギ先生と仮契約してる事を知ってるんだ？」

「え？」

しまった！原作読んで知ってますなんて口が裂けても言えません…

どう言い訳しよう…そうだ。

「ネギ先生と刹那の間に魔力のラインを感じたんですよ」

く、苦しい…でもまあ納得してくれたみたいで助かりました。

「ところで詩音さんはどうするの？」

「私も転移魔法は使えますが一人用なのでお二人を一緒に連れて行けないんですよ、ですから二人が転送された後、直ぐに私も転移します。それと刹那、私のローブの左ポケットに入ってる石を取って下さい」

「この石は？」

「刹那が持ってて下さい、それは私の魔力を込めた魔石です、それを目印に転移します」

「そういう事か」

二人がカードを額に当てて念話をして数秒後、二人の元に魔法陣が現れ転送されました。

「スクナ復活前に木乃香さんを取り返せれば一番良いんですけどね…」

そう呟きながら私も転移魔法を唱えネギ先生達の元へ向かう。

転移先の目の前にはネギ先生、その両脇に刹那とアスナさんの姿。

「あの！大丈夫でしたか？えっと…」

「大丈夫ですよ、見ての通り怪我一つ有りません。そう言えば自己紹介もしてませんでしたね」

「あ、ネギ・スプリングフィールドです」

「おれっちはカモだぜ」
「私は結崎詩音、呼び方は詩音で良いですよ。それよりも…」
私の視線の先には湖に作られた儀式場。
「ええ、そこで作戦です。僕が白髪の少年を引き付けてる間に詩音さん達でこのかさんを奪い返す、というのはどうでしょう？」
「ダメよ」
アスナさん？
「アンタ、また一人で無茶しようとしてるでしょ、私もアンタと一緒に戦うわよ」
「でも！あの少年は危険過ぎます！ここは僕一人で！」
「うっさい」
アスナさんのハリセンがネギ先生に炸裂、良い音しますね。
「！？！？」
「危険だって言うなら尚更アンタ一人で行かせる訳には行かないわよ、ちょっとは自分のパートナー頼んなさいよ！」
「確かに、今のネギ先生が一人で突っ込んでも返り討ち、上手くいっても大怪我でしょう、ここは素直にアスナさんの力を借りた方が賢明です」
作戦会議に時間掛けてる間にスクナ復活、なんて事になったら笑えませんよ、とっとと決めて下さい。
「…分かりました、アスナさん、一緒に戦って下さい！」
「そうこなくっちゃ」

「作戦も決まった事ですし行きますか。刹那、しっかり掴まってて下さい」
「ああ」
「アスナさんも僕の杖に掴まってて下さい」
「分かってるって」
「じゃあ、行きますよ！」

私達は低空飛行で一直線に木乃香さんの元へと向かう、湖まで出た所でフェイトが二体の悪魔を召喚。
原作では向かったのがネギ先生一人だけなので一体だけの召喚だったのが、私達も来たので二体召喚したんですね。

「ネギ！」
「このまま突っ込みます！加速！！」

ネギ先生がスピードを上げて一体の悪魔向かって突撃、更に最大加速まで使いそのスピードに乗ったまま魔力パンチで悪魔の胴を貫き倒した。
私の方はもう一体の悪魔に対し杖を構え砲撃を放つ体制に入る。
ディバインバスターよりも速射性に優れますが威力はその分落ちます、しかしあのレベルの悪魔なら十分に倒せるであろう砲撃魔法。

「ショートバスター！【Ｓｈｏｒｔ　Ｂｕｓｔｅｒ】」

閃光が悪魔を呑み込む、威力は僅かに衰えましたがまだ勢いは死んでいない、そのままフェイトに向かっていくショートバスターですが障壁によって塞がれました。

ここまでは予想していた事。
作戦はフェイトの目を眩ましその隙へネギ先生とアスナさんが背後

に回り込む。
障壁破壊の効果を持っているアスナさんのハリセンでフェイトのあの堅い障壁を破壊、その後ネギ先生のゼロ距離捕縛魔法によりフェイトを捕らえる。
私達はその間に二人がかりで木乃香さんを奪い返しそのまま離脱する、という作戦だったのですが。

「あぐっ！」
「きゃぁ！」

千草に向かって行く私と刹那が後ろを振り向くと、そこには倒れてるネギ先生とアスナさん。

ってまさかこの時点で失敗！？原作ならゼロ距離捕縛魔法で捕らえられるはずなのに！

「僕の障壁を破壊したのは見事だったよ、だけどその程度の作戦で僕をどうにか出来ると思ったのかい？」
「ぐっ…！」
「ネ、ネギ…」
「殺しはしないよ。ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト、小さき王八つ足の蜥蜴、邪眼の主よ」

不味い！あの体制じゃ魔法無効果を持つアスナさんがネギ先生を庇いに入るのに間に合わない！

「刹那！」

アイコンタクトで刹那にこの場を任せる事を伝え、私はネギ先生達の元へ走り出す。

「時を奪う毒の吐息を【石の息吹】」
「間に合って…！【Ｆｌａｓｈ　Ｍｏｖｅ】」
フェイトの魔法が当たるギリギリの所、フラッシュムーブで何とか二人を救い出せたのは良いですが…これは…不味いですね…。
「すみません、助かりました…」
「ありがとう詩音さん…っ！詩音さんその足！」
左足が膝辺りまで石化してしまいましたか…この状態で空を飛ぶのは少々厳しいですね、機動力も落ちてるからフェイト相手に高速戦闘なんて無理ですし…。
「くっ！僕が作戦通りに出来てさえいれば！」
「ネギ…」
「なってしまったものは仕方有りません、次の手を…」
「グオォォォォォォォッ！！！」
「何！？」
この声は…スクナが復活してる！！刹那は何を…っ！式神二体に足止めされてる！
「ホホホ！儀式はたった今終わりましたえ！」
「ぎゃぁぁぁぁっ！何よあれー！！」
「リョウメンスクナノカミ、十八前に詠春さんとサウザンドマスターが封じたのを木乃香さんの膨大な魔力で復活させたんですよ！」
「デケぇ！ちょっと待てよデカ過ぎるぜ！こここんなの相手にどうしろってんだよ！？」
「どうするもこうするも！完全に出ちゃう前にやっつけるしか無い

よ！ラス・テル・マ・スキル・マギステル！来れ雷精風の精！」
その魔法では倒せないんですよ！
「ネギ先生ダメです！」
「雷を纏いて吹きすさべ、南洋の嵐、雷の暴風！！」
私の言葉を無視してネギ先生は雷の暴風を放つ。
風を纏った雷の奔流がリョウメンスクナにぶつかるも傷一つ付けられない。
「そん…な」
「アハハハハ！それが精一杯か！？サウザンドマスターの息子が！！まるで効かへんなぁ！！」
「残念だったねネギ君…ここで終わりだ」
フェイトがこちらに近付いてくる、そのまま来れば…。
「っ！？」
フェイトの両手両足と胴体を光の輪が捕らえる。
「まんまと引っ掛かりましたね」
念の為レストリックロックを設置してたんですよ！これでも少しは時間稼ぎにはなります！
「今の内に刹那の所へ向かいますよ！」
「は、はい！」
「詩音さんは私の肩に掴まって！」

「助かります」
左足動かないんで歩き難いんですよね。
アスナさんの肩を借りて刹那の元へ向かう途中、すれ違い様フェイトが私に質問してきた。
「君は…随分と珍しい魔法を使うね、一体何なんだい？」
教えてやる義務は無いですよ、とだけ言ってやって左足を引きずりながら歩き続ける。
式神は既に倒したもののどうしようもない状態の刹那の元へ辿り着いた。

「刹那さん！」
「ネギ先生！明日菜さん！っ！？詩音その足は！」
「一応石化の進行は止めてますから大丈夫です、しかしこれでは空を飛ぶのは厳しいですね…」
飛べない訳では無いですが、高速飛行はとてもじゃないけど無理っぽいんで。
ヘタに飛んでスクナに近付いてもハエ叩きみたいに叩き落とされるのがオチですからね。
「でもリョウメンスクナだけなら倒せる可能性は有ります」
「「「「！！」」」」
「オイオイオイ！兄貴の雷の暴風でも効かなかったってのにどうしようってんだ！？」
「カモさん、私の最強魔法が最初に見せたアレだと思ってませんか？」
「あれ以上の魔法を撃てるんですか…？」

「ええまあ、ただ先に木乃香さんを助けださないと確実に巻き込んでしまいます」

高町なのはが生み出した最強の魔法スターライトブレイカー、これなら倒せなくてもかなりのダメージを与えられるはず。
それに一発でダメなら予備に持ってきた三つのマガジン使ってカートリッジフルロードで撃つだけです。

「それじゃあ僕が空を飛んでこのかさんを助けに！」
「いえ、ネギ先生…お嬢様を救い出すのは私がやります」

刹那を見ると意を決した表情、力を使うんですね…。

「で、でも刹那さん、あんな高い所にどうやって行く気なの？」
「そうですよ、刹那さん空飛べないじゃないですか…」
「私は…皆さんにも、このかお嬢様にも秘密にしておいたコトが有ります…この姿を見られたらもう…お別れしなくてはなりません」
「何を…」
「でも…今なら、あなた達になら…」

バサッ、という音と共に刹那の背中に現れる白き翼。
知っていた事とはいえ、実際に見ると一瞬見惚れてしまう程美しい翼。

「…これが私の正体、奴等と同じ化け物です」
「刹那…」
「すまない詩音、今までお前を騙すような真似をしてしまって…」
「何を言ってるんですか、私がこの程度の事でどうこう言う女だと思ってたんですか！」

これに関しては秘密を知ってようが知るまいが関係有りません。
そもそも、私の居た世界にはもっと色々な事情を持った人達だって居たんですから。

「しかし私は…！この醜い姿をお嬢様や詩音に知られて嫌われるのが怖かったんだ！」
「なーに言ってんのよ刹那さん、こんなの背中に生えてくんなんてカッコイイじゃん」
「え…」
「あんたさぁ…このかの幼なじみで、学園に来てから二年の学園祭まで影から見守ってて…その後ようやく一緒に居られるようになって…この一年誰よりも近くでこのかを見てきて…本気でそう思ってる？このかがこの位で誰かを嫌いになるような人間じゃないって、刹那さんは誰よりも知ってるはずでしょ」
「あ…明日菜さん…」
「それに私だってこの一年、刹那さんと一緒に居たんだからもうちょい信じなさい」
「そういう事です、刹那は気にしすぎなんですよ」
「明日菜さん…詩音…」
「ほら、早く行って刹那さん、このかが待ちくたびれちゃうわよ」
「僕達も出来る限り援護しますから」
「は、ハイ！」

白い翼を大きく広げ、空へ飛翔する刹那を見送る。
後は私達もやるべき事をやるだけですよ。

13時間目「星の光」

「それじゃあ私も準備します。アスナさん、すみませんが橋の先端まで行きたいのでもう少し肩を貸して下さい」
「オッケー」
「ネギ先生、あの少年がバインドを解きそうになったらゼロ距離で雷の暴風でもぶちかましといて下さい」
「ええっ！？」
「可愛い顔して容赦ねぇな…」
「いやいや、それくらいやれば多分効くと思いますから」
「いや！普通に考えりゃ死ぬだろ！」
「そうですよ！流石にそれはちょっと…」

動けない内にゼロ距離捕縛魔法で更に拘束しても良いんですが、本音を言うと殴られるより痛い目に合ってもらいたいところです。それに、この程度で死ぬ程やわな相手では無いのは分かってますしね。

「死ぬ事は無いでしょう、でもネギ先生があまり気が乗らないなら捕縛魔法でもかけ直しといて下さい」
「は、はぁ…」

なんか若干引いてますが気にしない事にしときましょう。

とりあえずフェイトはネギ先生に任せて私はアスナさんの肩を借りつつ橋の先端まで行きますかね。

「はぁ…はぁ…」
「だ、大丈夫？辛そうだけど」

「ええ…大丈夫です」

太股辺りまで石化が…少しづつですが進行していますね…早く終わらせて治療したいですよ。

自分で治療出来ないレベルの石化では無いですが、時間がかなり掛かるので後回しで良いです。

「ここで良いの？」

「はい、ありがとうございます」

橋の先端に立ち杖を上に掲げる、足下に魔法陣を展開し魔力収束を開始する。

「咎人達に、滅びの光を」

周囲に散った魔力の光が流星のごとく私の前方に集まり少しづつ大きくなる。

「綺麗…」

アスナさんの声、私が初めて見た時と同じ感想ですね。

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ」

光が収束し一つの大きな光の球になる、溢れんばかりの魔力が込められた光。

更に収束…収束…収束…。

後ろでネギ先生の詠唱する声が聞こえる、やはり雷の暴風は撃ちま

せんでしたか…ちっ。
魔力で視力強化した瞳に刹那が式神を切り捨て木乃香さんを奪い返すのがハッキリと見えた。
今だ！
「貫け！閃光！スターライト…ブレイカー！！【Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ Ｂｒｅａｋｅｒ＋】」
杖を振り降ろす、ディバインバスターとは比べ物にならない光の奔流がリョウメンスクナに襲いかかり体の半分程度を一気に呑み込む。
なんか悲鳴が聞こえた気がしたけどそれはどうでもいい。
数秒の放出の後、光の奔流はそのまま夜空を切り裂く一条の光のごとく舞い上がりやがて消えた。
そして光が止んだ後、私が見たのは腕が三本もげ、所々にヒビが入りピクリとも動かないリョウメンスクナの姿。
「すげぇ！凄すぎるぜ！」
「倒したの…？」
「いえ、ですがもう一発撃てば完全に倒せそうですね」
「待て」
懐からマガジンを取り出そうとしたところで後ろから声が聞こえた。
ビクッとしながら振り向くとエヴァが居ました、なんか怒ってませんこの人？
「エヴァちゃん！？」
「私に殺らせろ、この私が態々出向いてやったというのに着いてみれば既に終わりかけ…せめて一暴れせねば気が済まぬわ！！」

あー…まぁこちらとしてもエヴァがやってくれるのならその方が楽なんで助かります。
カートリッジフルロードするのは流石に負担がかかりますからね。

「小娘、貴様の一撃見せてもらった。中々のモノだがまだ甘い、私が今から最強の魔法使いの力を見せてやる」
「それはありがたい」
「それと、ぼーやもよく見ておけ、いいな！よーく見とけよ！」
「は、はいっ！」

それだけ言うとエヴァは空に舞い上がり詠唱を始める。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！契約に従い我に従え氷の女王！来れ！とこしえのやみ！えいえんのひょうが！！」

あの巨体を一瞬で凍結させる凶悪な魔法、クロノっちのエターナルコフィンと結構良い勝負しそうですね。
と、そういや千草はどこ？スターライトブレイカーで吹っ飛んだ？
まぁどうでもいいや。

「全ての命ある者に等しき死を、其は安らぎ也“おわるせかい”…砕けろ」

パチン、と指を弾くと同時に粉々に砕けちるリョウメンスクナの体。

「くくく…アハハハハ！」
「ご満悦だなオイ」
「すごーいエヴァちゃん！」
「どーだぼーや、私のこの圧倒的な力しかと目に焼きつけたか？」

そういいながら私達の前に降りてくるエヴァ。

「凄かったですエヴァンジェリンさん！」

「そーかそーかよしよし♪そこの小娘なんぞより凄かっただろう」

私を比較対象にしないで下さい。

「凄いよエヴァちゃんやるじゃん！でも詩音さんだって十分凄かったし何より魔法がキレイだったわ」

「アホか、魔法にそんなもん求めてどうする」

別に求めてる訳では無いんですけどね。

だからと言ってあまりに変な魔法は使うのに抵抗が有りますが。

「マスター」

「ん？なんだ茶々丸」

「私の出番が無かったのですが」

「知らん、文句ならそこの小娘に言え」

あー…まぁリョウメンスクナを行動不能にしたのは確かに私ですが、だからといってこちらに振らんで下さい。

「経費節減出来たと考えれば良いんじゃないかと」

そうとしか言い様が無いです。

それにあの質量を封じる結界弾って結構高額ですからね、使わずに済んだら学園長としても助かるでしょう。

この後、私はフェイトを更にリングバインドとクリスタルケージで

ガッチリと封じ込め本山へ連行、その途中で夕映や楓、小太郎といった面々と合流し無事に本山まで辿り着いた。
木乃香さんがそこで見たクラスメイトや父親、屋敷の人々が石になった姿、それが自分の所為だと責任を感じ、その治療の為ネギ先生と仮契約を結ぶ事となりました。
結果としては原作通り全員の石化も解け、今回の事件は無事に解決。フェイトと小太郎は詠春さんに引き渡し、ついでに千草もチャチャゼロが捕まえてくれました。ちなみに千草は発見した時点で既に気絶、うわ言で「光が…光が…」とか言ってたそうです。
事件解決を祝って行われた宴会の席、とりあえず初対面の人達に簡単な挨拶を済ませた後は程々に騒いでおきました。

ちなみにその時。

「今度手合わせするネ」
「拙者も是非一度戦ってみたいでござる」

とまあ、古菲と楓から勝負の約束をする事になりました。

宴会も終わり、時間は既に深夜１２時を回った頃。
事件も終わったので家に帰る事を詠春さんに告げ、外に出た所で刹那に遭遇しました。

「もう帰るのか？」
「ええ、私は刹那達と違って明日も普通に学校ですから」
「そうか…そういえば今回の件の礼をまだして無かったな。ありがとう、おかげでお嬢様を無事助けられた」
「別に良いですよ、今更そんな畏まるような仲というわけでも無いですし」

「それでもだ、こういう事はちゃんとしとかないとな…」
どこか悲しそうな顔をする刹那、理由は…やはりアレですかね。
「えーっとですね、刹那、烏族の掟の事は一応知ってます」
「…知っていたのか、なら話は早いな、恐らく二度と会う事は無いだろう…」
あー何か色々言いたい事が有るのに上手く纏まらないー！
「刹那にとって一番大切な人、そして刹那が何の為に今まで剣の修行をしてたのか、それを良く思い出して下さい、それと一族の掟、本当に大切なモノが何なのかを考えればどうする事が正しい答えなのかは見えるはずです、間違った答えを出さない事を願いますよ」
「一番大切な人…このかお嬢様…」
別に私がこんな事言わなくてもネギ先生達で引き止めてくれるのは分かってるんですけどね…分かってるのに…はぁ。
「それと、刹那が居なくなると悲しむ人達が居るんですよ、現に刹那が今話してる相手なんか泣いちゃうかもしれませんね」
冗談っぽく言うと刹那も笑ってくれました。
「それじゃあそろそろ帰ります、“また”会いましょう」
「ああ、“また”会おう」
お互い笑顔で手を振りながら、私は転移魔法を発動する。
「そうそう、近い内に会う事になる、とだけ言っておきましょう」

「え？」

転移直前にそれだけ言って本山を後にしました。

何度かの転移を繰り返し家に到着、事前に連絡はしておいたので母のお出迎えにほっと一息。

「お帰り、それとお疲れ様」

「ただいま、本当疲れました…お風呂入って早く寝ないと明日の学校が…」

「お風呂の準備は出来てるわよ」

「それじゃ入ります」

お風呂に浸かりながら今回の件を思い返す。

本来なら成功するはずの作戦が失敗した事、これは私が介入した事による変化なのか？それともそもそも確率の問題だったのか？この先安易に介入してしまうと今回みたいなマイナスの変化が起きてしまうのでは無いか？

最終的に無事に済んだものの取り返しの付かない事になると…考えるのが怖いですね…。

私はどうすべきなのか…。

答えの見えない思考を繰り返す、やがてお風呂の心地良さと疲労により、私の意識は闇に落ちた。

翌日の夜、家に電話が掛かってきた、相手は詠春さんだった。

電話の内容はフェイトが脱走したという事、予想はしていたとはいえこうもあっさり脱走されるとやはりムカつきますね…。

―それから数日後【5月1日】

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

朝、いつもの時間、ネギは明日菜達と共に学校へ向かう途中しずな先生に呼び止められた。

「ネギ先生ちょっと良いかしら」
「しずな先生、何でしょうか？」
「学園長がお呼びよ、転校生をネギ先生のクラスに編入させるとかで話しがあるそうよ」
「分かりました、すぐに行きます」

そう言うとネギは明日菜達の方を振り向く。

「そういう事なのでアスナさん達は先に教室へ行ってて下さい」
「ん、分かった」

ネギが学園長室に向かい、その場に明日菜、木乃香、刹那が残された。

「この時期に転校生なんて珍しいわねー」
「そやなー、どんな子か楽しみやわー」
「…なるほど、そういう意味だったのか」

小さく笑いながら一人分かった様子の刹那に木乃香が質問してくる。

「何が「なるほど、そういう意味だったのか」なん？」
「いえ、私の予想が正しければお嬢様も明日菜さんも知ってる人物ですよ」

「私もこのかも知ってる人物？」
「はえ？」
「とりあえず今は教室へ行きましょう」
「そやな、はよう行かな遅刻してまう」

三人は教室へ向かって走って行った。

場所は変わって学園長室

「ネギです、入ります」

二回ノックし、中から返事が聞こえドアを開ける。

「お久しぶりです、ネギ先生」
「あ、貴女は！」

ドアを開けたネギが見たのは、一週間前京都で起きた事件の際助けに来てくれた女の子の姿。

「転校生って詩音さんだったんですか」
「うむ、ネギ君も知っての通り彼女も魔法使い、裏の人間じゃ。本人も困った事があれば力になると言ってくれておるからの、頼りにするとよいじゃろ」
「そういう事です、これからよろしくお願いしますね、ネギ先生」

こうして彼女は麻帆良学園に転校してきた。
しかし、彼女は未だ明確な答えを出した訳では無かった。

結崎家の人々（設定）

結崎詩音（１５歳）

【外見】
白い肌に整った顔立ち（綺麗というより可愛い）、琥珀色の瞳に腰まで伸ばした銀髪。
身長は刹那より１ｃｍ低い１５０ｃｍ。
可愛い服を好む傾向。

【戦闘】
高速移動砲台。
神鳴流剣士。
最大射程は５ｋｍ。
マルチタスクを利用した複数同時詠唱。
魔力コントロールが非常に上手い。
効率化により魔法の消費魔力を５分の３近くまで軽減している。
魔力保有量は管理局基準でＡＡＡまで増加。
基礎身体能力は明日菜以上。

【使用魔法】
ミッドチルダ式・西洋魔術・オリジナル融合魔法

【現在までに出て来たオリジナル魔法】
魔法の射手の２属性融合
アクセルシューター＋（高速自動追尾性能付加）
戦乙女の輪舞曲（身体・動体視力・反射神経強化）
ローリング・ディバインバスター（元ネタはローリングバスターライフル）

【人物】
転生者。
クォーター。
ネットアイドル『シオ』として絶賛活動中（ファンクラブが母によって作られた、現在一万人突破）。
何気にコスプレに抵抗が無くなってきている。
前世と違い丁寧な言葉遣いを心掛けている。
デバイスならどのタイプでも制作可能。
怪我以上に微エロシチュエーションに巻き込まれないかを心配している。
二人の兄が悩みの種。
母に勝てないのも悩みの種。
胸が小さいのも悩みの種。

【前世】
デバイスマイスター。
リインフォース？制作の際、はやてのサポートしていた。
マリエル、シャーリーとは先輩後輩であり友人。
彼氏居ない歴２２年。
ＪＳ事件の３年後、２２歳の時交通事故で死亡。
自称神に右ストレートをぶち込んだ。

結崎レイラ（４〇歳）

【人物】
詩音の母、外見は詩音にかなり近い。
十代後半に見られる程若々しい。
身長は１６１ｃｍ。
ロシア人の父と日本人の母を持つハーフ。

旧姓はファレエフ。
ＨＰ“シオ・スタイル”の真の主。
魔法剣士。
始動キーは『ニャンコ・コニャンコ・マゴニャンコ』
かなりの実力者、ラカンの強さ表で言えば６５００位。
性格はフリーダムで娘ラヴ。
何気にマギステル・マギ。

父（４９歳）

【人物】
社長さん。
奥さんと娘命。
奥さんと本契約済み。
奥さんの従者。
強さは７００位。

兄（２７歳）
兄２（２５歳）

【人物】
共にシスコン。
共にＭ気質有り。
共に強さは３０位。
共に詩音と仮契約したがってる。
共に両親から早く恋人作れと思われてる。

１４時間目「三日限りの師弟関係」（前書き）

少し遅くなりましたが１４話投稿です。
読者の皆様、まだまだ未熟な小説ですが今年もよろしくお願いします。

１４時間目「三日限りの師弟関係」

「結崎詩音です、よろしくお願いします」

学園長室を後にし、ネギ先生に連れられ３－Ａの教室まで来た私はネギ先生に紹介され転校生としての挨拶を済ませました。

「「「「「よろしくー！！」」」」」

やはりノリが良いですねこのクラスは。

おや？さよちゃんがクッキリハッキリ見えるんですがこれは一体…。

「既に何人か知ってる人も居ますが、折角ですし十分程質問タイムを取ろうと思います。詩音さんも良いですか？」

「構いませんよ」

私が返事をすると共に矢継ぎ早に質問の嵐、正直聞き取れないんですけど。

「わわわ、み、皆さ～ん！落ち着いて下さ～い！」

「ほらほら、いっぺんに質問しても詩音さんも答えられないんだから一人づつにしなよ」

ネギ先生が抑えようとしてくれたみたいですけど収まらず、代わりに朝倉さんのおかげで何とか落ち着きを取り戻し一人づつ質問をする事になりました。

「朝倉～、こういうの得意でしょ？代表して質問してよ」

「ふっふっふ、私は既に友達になって色々取材済みなのさ」

「なにー！？いつの間にー！」

この前の宴会の席で質問されまくりましたからね、危うくスリーサイズまで教えそうになりましたよ。

ちなみにクラスメイトからの質問と私の解答

Q. ご趣味は？（委員長）
A. 機械弄りと運動です

Q. 好きな食べ物と嫌いな食べ物は？（鳴滝姉妹）
A. 好きな食べ物は甘い物全般、嫌いな食べ物は匂いの強い物

Q. 十歳で先生ってどう思う？（ゆーな）
A. 労働基準法とかどうなってるんですか？

Q. ネギ君をどう思う？（まき絵）
A. 可愛い弟って感じですね

Q. 彼氏居るの？（柿崎）
A. いません、というか今は要りません

Q. ネギ君を彼氏にとか（椎名）
A. 有り得ないです

Q. 私と手合わせするネ（くー）
A. それ質問じゃ無いですよね？

Q. スリーサイズは？（朝倉）
A. 上からろく…って何を聞いてるんですか

この質問の結果、後々千雨さんから「最初はまともな人間だと思ってたのに」と言われる事になるとはこの時は思ってもみませんでした。

「時間も押してきましたし最後の質問にしたいと思います」
「それじゃハイッ！何でこの時期に転校する事になったの？」
「以前から学園長にスカウトされてたんです、それで最近やっとこちらの都合が着いたので転校という事になりました」
「スカウト？」
「何のスカウトかまでは秘密です」

去年の学園祭以降、麻帆良学園に来ないかと誘われてましたが結構迷ってました。
学園側が魔法生徒としての力を必要としてたのは確かでしょうが、原作開始前に学園に来てもな～と思って遅らせたのは内緒です。
第一エヴァの吸血鬼騒ぎの前に転校してたら狙われたかもしれませんからね、まぁあの状態のエヴァなら超長距離からの砲撃で何とかなりそうでしたが。

「以上で質問タイムは終わります。では詩音さん、一番後ろの席、エヴァンジェリンさんの隣の席に座って下さい」
「はい」

やっぱりエヴァの隣の席になりますか…。

少々不安を感じつつエヴァの隣の席まで行って座る事に。

「よろしくお願いします」
「ああ」

こ、怖っ！なんかニヤッとされた！

「貴様には少々興味がある、正確には貴様の使う魔法に、だがな」

「い、いつか機会があれば話しますよ」

微妙に落ち着かないまま時間は進んで昼休み、一緒に昼食を食べようとアスナさんに誘われ外に出る。メンバーはアスナ、木乃香、刹那、私の計四人。

机を囲み和気藹々と会話しながらお弁当を食べました。

「なぁなぁ、詩音さんの部屋ってどこなん？」

「６１６号室です、暇な時にでも遊びに来て下さい」

「あれ？６１６号室って他に誰か住んでたっけ？」

「私一人ですよ、一応説明しときますが、私が部屋を一人で使えるのはこないだの京都の一件での報酬に金銭の代わりに一人部屋を要求したからです」

京都の一件での報酬として部屋を一人で使わせるのともう一つ、私の使う魔法を学園側は一切詮索しない事を条件にしてこの学園に転校する事にしましたからね。

「報酬ってなんで詩音さんだけ！」

「だって、あの時点では私は部外者でしたし、学園長から依頼されて京都まで行ったんですから報酬を貰うのは当然です」

「私だって頑張ったのに～」

なんか納得出来ないという感じのアスナさんは放置しておいて私は箸を進める。

そこにネギ先生が通りかかったので一緒に昼食を摂ろうとお誘いし

ました。

「はぁ～…」

「どうしたのよネギ、溜め息なんかついて」

「すみませんアスナさん、エヴァンジェリンさんのテストの事を考えてまして…」

「テスト？」

分かって無いフリをして聞いてみます。

「こいつね、エヴァちゃんに弟子入りする為のテスト受ける事になってるのよ」

「それが土曜日の…正確には日曜日の午前０時なんです」

「で、テスト内容は何なんですか？」

「茶々丸さんと一対一で戦って一撃入れれば合格です、それで今はくーふぇさんに中国拳法を習っているんですけど…」

「正直自信が無い、と」

「はい…」

少しばかり手伝ってあげますか、この位なら問題無いでしょうし。

「でしたらネギ先生、放課後時間取れますか？」

「放課後ですか？くーふぇさんとの修行が終わった後なら大丈夫ですけど、どうするんですか？」

「ちょっとした修行のお手伝いですよ、古菲さんとの修行が終わった後、私の部屋に来て下さい。念の為に言っておきますが魔法に関する事なので一般人は連れて来ないで下さいね」

「え？あ、はい」

「あ、私は行っても大丈夫？」

「ウチもええ？」

「お嬢様が行くのなら私も」
「構いませんよ」
放課後のネギ先生の修行に付き合った後、ネギ先生、アスナ、木乃香、刹那、ついでにカモを連れて私の部屋に向かいました。

「皆さん入って下さい」
「「「「お邪魔しまーす」」」」
「うわーなんか良く解らない機械とかが一杯あるわね」
「ほんまやー」
「ちょっと待ってて下さい、カモさんは下着を漁らないように」
「お、おれっちがそんな事する訳ねぇだろ！」
「したら胴体ねじ切りますからね」

一応カモに釘を刺しておき部屋の奥にある押し入れを開ける、そして肩幅より一回り大きいサイズのガラス玉――エヴァの持っている『別荘』に近い物を取り出しネギ先生達の元へ戻る。

「お待たせしました」
「あの、詩音さんこれは？」
「このガラス玉はマジックアイテムなんです、とりあえず説明は中に入ってしますから私の周りに集まって下さい」
「中に入る？」
「まぁまぁ、良いから良いから」

周りに集まったところで呪文を唱えて魔方陣を展開させ、私達は光に包まれながらガラス玉の中に入りました。

「な、なに？！何処よ此処！」
「ほわ～」

「これは…」
「うわースゴいですねー」
突然周囲の背景が変わって皆さん驚いた様子ですね。
内部はドラ〇ンボールの神の神殿を元にした造りにしてみました、漫画と違って下に落ちても雲の上に着地出来る安心設計です。
「そんじゃまぁ説明するんでちゃんと聞いて下さいね」
この中の時間は外の三倍の速さで時間が流れてます、つまり外での一時間はこの中では三時間な訳なので、単純に考えて三倍の修行時間が取れます。
ただ、この中の時間で三十分単位でしか外に出れませんからその辺は注意が必要です。
オプションとして自由に環境を変えたり五倍まで重力を重く出来ます、その他にもちょっとした機能が付いてますが今は別に良いでしょう。
元は母の物だったのを譲って貰い、機能もエヴァの別荘とほぼ同じだったのですが、私が色々手を加えた結果今の性能になりました。
時間の面で大幅な劣化をしてしまいましたがその辺はオプションでカバーです。
エヴァの別荘云々のところは抜きで一通りの説明を終えました。
「詩音は普段から此処で修行していたのか？」
「いえ、私自身これを手に入れたのが先月ですし中に入った事も三回しか有りませんよ」
実家の倉庫で埃を被ってたのを発掘したのが先月の始めでしたからね、後は内部の改築の為に中に入ったくらいです。

刹那の質問にも答えたところでネギ先生の修行を開始する事に。
「さて、修行時間が増えたとはいえ余裕が有る訳でも有りません、なので最低限役に立ちそうな事だけ教えます」
「ハイッ！よろしくお願いします！」
「私が教えるのは二つ、身体強化の魔法と瞬動術です、どちらも今のネギ先生なら十分出来ると思います」

そんな訳でネギ先生に『戦いの歌』の術式を教えてから二時間。最初に比べるとそこそこ安定してきたので調子を聞いてみました。

「どうですか？」
「今まで自分でやってた魔力供給とは全然違いますね、魔力の流れもスムーズな感じで力がみなぎってきます」
「これをそうですね、今位の出力をテスト当日までに五分は維持出来る程度にはなって下さい」
「は、ハイッ！」
「それと、ネギ先生と茶々丸さんは近接戦闘の実力に大きな差があるらしいですから短期決戦を考えた方が良いでしょう、なので出力全開の状態で最低でも三十秒間戦える様になればギリギリのラインかと」
「全開で三十秒ですか…」
「三日の修行なら精々その位ですよ。エヴァさんの弟子になったらもっと厳しい修行になるでしょうし頑張って下さい」
「ははは…頑張ります」

こうして三日間限りの師弟関係一日目は十二時間（外の時間は四時間）の修行をし、身体強化魔法『戦いの歌』を習得させ、休憩を挟みつつその状態で組み手をする事に。
ちなみに私がネギ先生の修行を見てる間、刹那とアスナさんは剣の

稽古をし、木乃香さんはそれを眺めたりウロウロしたり。
途中木乃香さんに魔法覚えてみませんか？と聞いてみたのですが「考えてみる」と言われたのでとりあえずこの件は保留する事に。
そして外の時間が夜十一時を回ろうとしたところで修行を切り上げて外へ出ました。

「今日はありがとうございました」
「いえいえどういたしまして」
「アンタもうこのまま詩音さんの弟子になっちゃえば？」

何を言い出すんですかこのツインテールは。

「えっと…」
「私はお断りしておきますよ、ネギ先生程の才能を私の元へ置いておくのは勿体無いので」
「そっか、エヴァちゃんより良いと思ったんだけどなー」

良くない良くない。

「じゃあ私達も部屋に戻ろっか。詩音さんお邪魔しましたー」
「お邪魔しました。詩音さん、明日もよろしくお願いします」
「はい。ではお休みなさい」

全員が退室した後溜め息を尽く。

「ネギ先生の強化位なら大して影響無いでしょう…多分」

原作介入するにあたってネギ先生の成長、特に精神面の成長機会を奪わない事を第一に考えてみても早めに強くなる事は悪い事では無いはずですし。

「結局のところ、私に出来る事なんて駒の一つとして戦う事と原作知識を生かしてサポートするくらいなのかもしれませんね」

下手に暴れると原作知識というアドバンテージを失い兼ねませんし、細かいところで違っても大筋には変わり無いはずですから。

となると出来る事といえば……そうだ、夕映さんとのどかさんを原作より強くして魔法世界での危険を減らすというのも良いかも。後、カモに呪いを掛けてエロい事出来ないようにするのも良いかも。呪いの方はともかく、二人の強化は真面目に考えときましょう。

新たな目的を考えつつこの日は眠りに尽きました。

１４時間目「三日限りの師弟関係」（後書き）

少し日が空いた所為か自分で書いておきながら文章に違和感を感じます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6532i/

二度目の人生は魔法先生ネギま!の世界

2010年10月10日14時43分発行